

東日本リアリズム演劇会議機関誌

東り演

各劇団総会から学ぶ

仙台小劇場
劇団 労 芸
劇団 静 芸
弘前演劇研究会

東り演の創作運動

山 崎 欣 太

素朴な疑問のいくつか

池 田 博

『キューポラのある街』評

下 郷 勝 美

『傷だらけの天使』評

矢 部 秀 一

仲間の活動予定から

東 西 南 北

東り演担当者会議報告

寸劇 ば か 退 治

丸 子 礼 二

構成詩「うたごえ」のあるところ荒木栄

あなたは生きつづける

作 間 雄 二

戯曲 ガード下から

栗 木 英 章

2

1966年3月

各劇団總會から学ぶ

第六回總會の報告

仙台小劇場

私たちは去る一月の第六回總會で「劇団発展総合三ヶ年計画」を決定しました。仙台小劇場は創立五年で、よりやく具体的に長期計画をたてることのできるころまで成長したことになります。

三ヶ年計画を軸に

仙台小劇場の五年間とくに昨年の活動をふりかえってみて、二つの大きな弱点があることがわかりました。

その第一は、活動量——創造活動、演劇・文化分野での運動組織面での活動、民主的諸運動への参加などの全面にわたって——が劇団の外部から要請される量から云っても、私たちがやりたい、必要だと考える量から云ってもかなり不足しているという弱点です。

第二の弱点は、創造内容や劇団員の理論的思想的な成長の面でも、参加しているさまざまな対外的な活動で劇団が果している役割の質的水準がまだまだ低いという弱点です。

この二つの弱点は、ひとくちに云って、仙台小劇場は、劇団を支持し期待してくれてい

る多くの人々の要求の発展、そして私たちをとりまく情勢の発展にくらべて大きな立ちおくれが生じつつあると云うことです。

この二つの弱点は、質両面の——を一気に克服するためたてられたのが三ヶ年計画です。

三ヶ年計画は、(1)劇団員を三ヶ年で五十名以上にふやす。(2)中堅劇団員を中心に質的に向上させる具体的なプラン。(3)創作活動を中心とした創造内容と創造技術の改善の三点を骨子としてたてられています。

劇団員を飛躍的にふやすことによって、現在の二倍——活動量を増加させるとともに、劇団員の一人あたりの活動量が過重にならないようにして質的向上に打ちこむ余裕を確保するとともに、中堅劇団員が責任をもって新しい劇団員を指導できる程度まで自らの力量を高める。地域劇団として、たえず情勢に即応した創造普及活動ができるようにするため、既成作品(戯曲)にだけたよらなくても良い条件をつくりあげる、というのがねらいです。

この三点と関連して、激増するであろう新入劇団員の養成(期生教育)の問題、劇団規律の問題、実務体制、活動の拡大計画が三ヶ年計画に盛り込まれています。

期生募集・教育を中心に——今年の方針

さて、この三ヶ年計画のうちで私たちは劇団員数をふやすということにも、とも重点をおいています。七月から第三期生の養成がはじまりますが、それまでに二十名ないし三十名の期生を募集するために、劇団のあらゆる活動を期生募集の活動と結合する方針でやっています。七月初旬には「陸橋」を公演しますが、この普及活動と結合して約一万の期生募集のチラシをつくる計画です。この期生募集と「陸橋」公演を成功させることが、今年上半年の最大の活動になるでしょう。

下半期は期生教育と小公演が中心になります。期生教育を私たちは公演と同じくらいに比重で重視し、徹底的に計画性と内容の充実をはかるつもりです。同時に小公演のあいまを縫って、中堅劇団員教室が開かれます。この教室は、基礎的技術の再訓練と劇団活動の理論的な学習が中心になります。

小公演は職場演劇祭、郡部公演のためのものです。

以上が、今年の活動計画のあらましです。この一年間で私たちは三ヶ年計画を成功させる土台をしっかりとすえる覚悟でいます。

右にのべたような今年の計画が現実のものになった時には、私たちはひとまわり大きな三ヶ年計画第二年度の計画をたてることのできるはずです。

みなさんの力強い支援と指導をおねがいします。

第六回仙台小劇場総会議案書

第一章 一九六五年の活動から

第一節 活動の分析

昨年は、自主公演「陸橋」が中止されましたが、中小の公演がかなり多くあった時でした。これから今後の方針を考えるわけですが、そのために昨年一年の活動経過を考えてみることにしましょう。

- (1) 一月 全建労文化祭に「果ばなれ」出演
 - (2) 一月～三月 社教・地方公演「貞婦表彰」
 - (3) 四月山形勤労者演劇祭参加「貞婦表彰」
 - (4) 四月メーデー前夜祭・狂言劇「鈴ヶ森」
 - (5) 六月春の職場演劇祭「貞婦表彰」
 - (6) 八月母親のつどい「貞婦表彰」
 - (7) 十月秋の職場演劇祭「芽ぶき」
 - (8) 十一月青年の家「次郎案山子」
 - (9) 十二月社教・田尻公演「貞婦表彰」
- 「果ばなれ」「鈴ヶ森」「芽ぶき」各一ス
テージ、「貞婦表彰」六ステージという公演

回数、劇団としてそれほど多い回数といえませんが、一昨年からくらべるとかなり多くなっていることは事実です。(一九六四年、「カンカラ広場に集まれ」「はだしの青春」「果ばなれ」計三ステージ)

公演回数が多くなったことと同時に、全建労文化祭、母親のつどい、メーデー前夜祭などのように、民主的な集会に出演を要請される回数がぐんと多くなりました。体勢がとれなくて参加できませんでした。「宮城県青年と教師のつどい」「宮城のうたごえ」「アカハタ開き」などからも出演要請がありました。このことは、仙台小劇場が客観的にも働く仲間の劇団として認められてきた現れであると思います。

しかし、どんな事情があったにせよ、かなりの数の出演要請に応じ得なかったことは非常に残念であります。いくつかの小公演用レパートリーが十分に準備されており、人数その他の体制が整っていれば実現できた例ばかりです。

一昨年十二月に開かれた第五回総会資料には「私たちが観客として考えている人々働く仲間、仙台小劇場の基本方針に基いた内容の、しかも、もっと質の高い演劇を強く求めています。この働く仲間の強い要求は、今後ますます大きくなるでしょう」とあります。

昨年一年の経過をみると、まさにこの通りになりました。仙台小劇場に要請されている活動はますますひろがってきたばかりでなく、

質的に多彩な内容を必要とされるようになってきています。例えば「母親のつどい」の場合、主催者側の希望したのは母親の歴史をテーマにしたものでありましたが、「宮城のうたごえ」は音楽構成劇的なものでありました。

このように発展し、多彩になった活動要請に対して、われわれはできるだけ努力を傾けてそれに応えてきました。しかし、応えきれなかった。このことは何を物語るのでしょうか。明らかに働く仲間を中心とする多くの人々の文化的、演劇的要求の拡がりや深まりのテンポに、仙台小劇場の発展のテンポがついて行けなかったことを示しています。まことに残念なことですが、仙台小劇場は、われわれをとりまく情勢の発展に立ちおくれを見せはじめています。

自主公演という、もっとも重要な活動を中止せざるを得なかったことも考え合せると、働く仲間がいま必要としていること、私たちに果してもらいたいと要請している活動に応じきれないというこの意味は深刻です。どんなにうまい方針をかかげても、こんな状態がいままで続くならば、私たちは働く仲間の信頼と支持を失ってしまいます。

このような事態を招いた大きな原因は、なんといっても、劇団員の絶対数が決定的に足りないこととあります。それが昨年の活動をどんなに制約したかわかりません。一期生中心の「芽ぶき」はべつにして、他の四本は全て同一劇団員がいくつもの役を受け持

っています。しかも、その劇団員はみんな劇団運営の中枢部にある人々でありました。同じ人がいくつもの上演レバをあたえ、よくいこし、劇団運営上の実務も処理していくと云う事態は、活動の量を制約したばかりでなく、ひとつひとつのレバを充分に研究し、けいこすることをできなくし、基礎的、技術的、創造上の思想的・技術的側面の発展に良い結果をもたらさなかったし、劇団運営上で綿密で系統的な計画性と実践上の体勢を著しく弱めました。

創造上の問題についてみると、上演の意義脚本分析、行動線の発見などについての作業がきわめて不十分にしか行われず、形象上の手がかりを確信をもって把握することができない状態がほとんどでありました。また、形象を深め、明確にする作業を充分に行なう余裕がなかったために、真実感のない形だけの演技をくりかえす結果になっていました。そのため、一期生以前の劇団員が共通にかかえている創造上の問題（役への没入・役の相互交流）が依然として解決されないままになっています。この問題を解決するところまでけいこが熟さずに終わってしまうので、非常に充実感の少ないけいこになってしまっています。また、矢張り早くに公演体制が続いたため、じっくり腰を落ち着けて基礎訓練をすることが出来ませんでした。その結果、劇団員のなかにはごく初歩的発声、呼吸、物云う術、役の形象上の能力をきわめて不完全にしか体得

しておらず、しかも、その状態をいつまでも改善できないでいます。

二期生の教育が、公演準備のため、しばしば中断され、井上君にまかせっきりになり、系統的な教育が行われなかったのも、創造上の能力を高めるといふ観点からも重大な問題であります。

劇団運営の面をみると、限られた人がけいこに追いまわされたために、劇団の活動の方向、計画、その時々の問題点などが全面的にしかも綿密にたてられず、目先のスケジューン調整や問題を形式的な処理で当面の事態を糊塗する傾向が生れてきました。同時に、活動の意義や目的、内容が劇団員全体で充分に討議学習する余裕がなく、そのために、活動への参加の姿勢に積極性と自主性が乏しくなるといふ傾向が生じました。例えば、舞台製作、職員の宣伝活動（チラシまきなど）、各種の集会の手伝い、プリント製作などが特定の人の肩にかかり、その人の犠牲的な行為によって維持されるという事態が生じたのは、その現れです。

また、当面する活動においかわされて、劇団員の生活面についての配慮が不足し、かなりの人の動揺や悩みに対して充分話し合い、激励してやり、劇団全体の信頼と団結を強化することに手ぬかりがありました。昨年一年間で実質上十二名の劇団離脱者を出したことは、いちがいに劇団側の責任とばかり云えない面もありますが、（職場と劇団との活動

を両立できなかった人や、かなり手をつくしてみたが脱落した人もあり）、反面このような人にも参加できる活動をきり捨てて、活動の巾を狭くしてしまつた劇団活動のゆとりはなさば、やはり考えてみなければならぬと思います。

自主公演を中止せざるを得なかった理由は複雑ですが、主要な点は、劇団員の思想的、技術的水準を無視して、いっぱいいいいっぴい体制を組んだことから来た無理にあると思います。

このように分析をすると、昨年の活動は、欠点ばかりで進歩は少しもなかったように印象づけられると思いますが、決して進歩がなかったわけではありません。

創造上について云えば、第一に、山形勤労者演劇祭や春の職場演劇祭で示した「貞婦表彰」の舞台は、仙台小劇場にとって今までになかった技術的な水準を示したと思います。秋の職場演劇祭の「芽ぶき」は、一期生中心の新人の舞台であったにもかかわらず、観客に新鮮な感動を与えた点で高く評価すべきだと思います。

前者が良い結果を得たのは、不十分ながら「貞婦表彰」のもつ意義や、再演にあたってさらに深めるべき点を「劇団ニュース」や話し合いで討議し、さらに社教公演などで比較的けいこ量にめぐまれたことにあると思います。後者の場合、丸森現地調査へ行ったり、そのことを「劇団ニュース」に連載したこと

で得た確信と、劇団内から初めて出た創作劇の上演というよるこび、改作上の問題点をみんまで話し合つたことからくる戯曲の理解の深まり、初舞台の人が多かったことからくる真剣な舞台づくりがよい結果をもたらしたと思います。

以上のことは、充分討議や学習を深め、けいこ量を充分確保すれば、良い舞台をつくり力がわれわれにはあるのだと云う、あたりまえなことですが、大事な教訓を示しています。

第二には、劇団内からはじめて創作劇を上演したことは、大きな前進であつたと思います。劇団のなかから生れた創作劇でもりっぱに良い舞台ができるのだという自信を得た意義は大きいものがあります。この前進は、決して作者一人の力によるものではなく、それ以前から徐々に盛り上つてきた劇団全体の創作意欲の高まりの上に立つてはじめて成功したものです。同時に作者と共に劇団員がいっしょに現地調査をし、作者の創作の過程（発想、構想、発展）を劇団員みんながいっしょに歩み、いっしょに考え、いっしょに悩んだことが、作者にとつて、単に精神的な支えになつただけではなく、創作をすすめる上での実に大きな実際の助けになりました。また現地の人々と単に調査ではなく、農作業を手伝い、芝居をみてもらい、同じ仲間として語り合うことができたことの創作への反映は、はかりしれないものがあります。「芽ぶき」を生み出した活動は、実に豊富な教訓を残し

てくれました。

劇団運営の上では、先に述べた欠点はありましたが、とにかくも、運営委員会がかなり数多く開かれ、一昨年にくらべると、問題の処理の仕方や考え方の上で、一歩と習熟したと云えます。また、脱藩者が多く出た反面、それぞれの能力に応じて責任をもつて課せられた仕事を果すことのできる人が出て来たことは、劇団の将来を考える上で非常によろこばしいことだと思ひます。

運営委員会と相い補いながら、劇団ニュースがかなり定期的に発行されたことも今年の前進面でした。今後、劇団員の投稿を多くして、みんなに親まれるように紙面を改善し、その時々々の活動上のポイントを機敏に知らせるように内容を充実させて行けば、劇団の潤滑油として大きな役割を果たすと思ひます。

第二節 活動のまとめ

以上のような分析をまとめみると、小劇場の基本的な矛盾は、劇団をとりまく情勢の発展に応じきれない劇団の発展のテンポの立ち遅れにある。劇団をとりまく情勢は、小劇場小劇場に対して、もっと数多くの、もっと様々な内容と形式の、もっと質の高いレベルトリイを用意し、それを運用して活動することを強く求めているということが明らかです。それに対して小劇場の劇団員は決定的に少ない。私たちは、もっともっと劇団員

を多くし、一人ひとりの劇団員の肩にかかる仕事はできるだけ軽くし、そのかわり、じっくりと研究、学習、けいこをつみ重ね、質の高い仕事ができるようにすると同時に、これからはますます増大するであろう私たちへの活動要請に充分応えることのできる劇団員の数と創造と活動の水準を高める必要があるということを昨年の経験は教えています。

以上のことは、数を増やすという側面と質を高めると云う側面の二つの必要を示していますが、（しかも、それを活動の量と質を落さないでやり遂げる）第一節の分析で明らかたように、劇団員の数を増やすと云うことが第一に重要です。数を増やすことが質を高めることでもある程度保障するといふ関係にあることは、第一節でみてきた通りです。数を増やすことは、なるべく急いで実現する必要がありす。早い時期になるべく数多くの劇団員の養成されるならば、それだけ早く劇団の活動はしやすくなります。多くの劇団員が増えるということは、劇団の内部に活気をもち、主観的にも愉快な楽しい気分をもち、劇団活動を積極的にするでしょう。次に、現在の劇団員がもっと効果的に活動ができ、昨年のような欠陥をなるべく少なくするような方法と劇団員の自覚を高めることが必要であると思ひます。なぜなら、昨年の活動の欠陥は、基本的には、確かに少ないメンバーで無理な活動をしたことから来ていますが活動上の任務の配分は、第一節に述べたよう

に、かなり特定の人にかたよってしまいました。劇団員の一人ひとりの能力や積極性などを考慮した結果そのようになつてしまつた面があります。もっと全員の積極性と仕事に対する責任感を高めるなら、もっと質の高い活動ができたはずだからです。

劇団員の数を増やすと云つても、期生教育を経て活動にたずさわるようになるまでは、一定の期間を必要とします。それまでの間は現在の劇団員でやつて行かなければなりません。このことを考えると、現在の劇団員がもっと創造上・実務上・活動上の能力を高め、責任をもつて仕事を遂行できる旺盛な意欲をいっそうもやす必要があります。このことがなくては、どんな綿密な計画も絶対に実現しません。現在の劇団員は、現有勢力で自主公演、中小公演を含む諸活動、期生教育の三つをやり遂げながら、自らも高まらなくてはなりません。これはかなりきつい仕事です。一人ひとりがある程度歯をくいしばつて仕事のきつさを耐えぬかなければならぬでしょう。しかし、耐えぬくことなしに仙台小劇場の発展は、あり得ません。それは、第一節で分析したことから結論づけられる客観的事実です。このきつい仕事を、いかにしたら愉快に楽しくやり遂げることができるか、これが今後の方針を立てるかなめになると思います。

第二章 仙台小劇場発展の三ヶ年計画

第一節 三ヶ年計画の展望

すでに第一章で昨年の活動からひきだされる教訓として、仙台小劇場の飛躍的な発展がぜひとも必要であることが明らかにされました。このことは、いま改めてのべるまでもなく、川渡での話し合いの時、いや、それ以前から三ヶ年計画の構想として話し合われてきたことです。運営委員会は、個々に話し合われてきたことを整理補足して、ここに「仙台小劇場発展三ヶ年計画」として、総会に提出し、みんなの討議にゆだねたいと思います。「仙台小劇場発展三ヶ年計画」（三ヶ年計画と呼ぶ）は、次のような内容をもっています。

- (1) 劇団員の数を五〇名以上に増やす計画
- (2) 募集の方法
- (3) 期生教育の体制と教育内容
- (4) 中堅劇団員の育成
- (5) 創造能力・指導力の向上
- (6) 専門分野の開拓
- (7) 製作能力の向上
- (8) 舞台制作能力（演出、舞台装置、照明など）の向上
- (9) 劇団の規律
- (10) 劇団運営の実務体制
- (11) 発展に伴う活動の展望
- (12) その他

三ヶ年計画は、劇団員を五〇名以上に増やすという、在仙自立劇団では、まだ経験したことのない大世帯の劇団をつくりあげ、活動の巾と質を飛躍的に発展させるという画期的な計画であります。したがって、この計画を現実のものにするためには、かなりの困難がとうぜん予想されます。果して、五〇名以上の劇団員を集めることができるか、集った劇団員を充分に養成できるか、集った劇団員をしっかりと統結して、フルに活動を展開できるか、数えあげるといくらでも困難な条件があります。

しかし、私たちは劇団員がほんとうに心を合せて真剣にこの計画実現のために努力するならば、必ず成功できるという確信を持っています。第一章でみてきたように、この三ヶ年計画をたてる決意を固めさせたのは、年々増加する外部からの活動要請があります。活動の要請が増えていること、これはとりもなみさず仙台小劇場を支持する人々がますます増えているということです。私たちが支持する人々、この人々こそ、仙台小劇場に劇団員を送りこんでくれる供給源があります。仙台小劇場のあらゆる活動を激励し、きびしく批判し、創造のエネルギーを与え、質を高めてくれる源であります。仙台小劇場がさまたげ、困難や妨害にぶつかった時、われわれといへしよにそれをはねのけてくれる防波堤でもあります。

私たちは三ヶ年計画の実践にあたって、な

によりまず仙台小劇場を支持してくれるた
くさんの人々のことを念頭におき、この人々
の力にたよらなければなりません。

もちろん、三ヶ年計画を実現させる主体は
私たち自身であります。仙台小劇場を支持し
てくれる人々の無形の力をかたちあるものに
変え、現実の力とするのは私たち自身の実践
であります。私たちは、りっぱにその条件が
ととのっていると思います。実動二〇余名の
劇団員は、基本的に意志を統一しており、私
たちの団結は強固といえないまでも、弱くは
ありません。そして、経験二年以上の劇団員
が全体の約半数を占め、指導能力も備えてい
ます。二年以下の劇団員も意欲がさかんであ
り、活動力も旺盛です。そして、全ての劇団
員は例外なく仙団小劇場がいま大きく発展す
る段階にきていることを充分理解し、その必
要を切実にねがっています。

私たちが、このように劇団の内と外にある
有利な条件を充分に生かして三ヶ年計画実現
のために取り組むなら、必ず私たちの計画は
成功するでしょう。

いま、日本のすべての国民は、日本をほん
とくに独立させ、平和で民主的な祖国を築き
あげ、不正義の戦争をやめさせ、生活を豊か
に向上させるために、より多くの人々と力を
合わせて努力する道をえらぶか、それとも、
再び軍国主義を復活させ、生活を破壊し、人
間としての権利を失った奴隷としてしか生き
られないファシズムの道を歩むか、いづれかの

選択をせまられています。もちろん、前者の
道をえらぶ人々はずっと増え、後者の道を
えらんだごく少数の人々は、やがて孤立し、
滅び去ってしまう運命をたどっています。

そして、前者の道を歩む人々の先頭に立ち
行く手を明るく照らし出し、前進を妨げるさま
ざまな困難をきりひらいている先頭部隊に、
私たち働く仲間、労働者がいます。

仙台小劇場は、この先頭部隊のなかにあつ
て、文化、とくに演劇の分野を担う集団のひ
とつてあります。したがって、他の在仙自立
劇団より多くの困難を引き受けなければなり
ません。そのために、より強い団結、より高
い能力、よりすぐれた規律、より固い意志が
必要であります。

しかし、同時に、ますます多くの人々の歩
む道の先頭に立っていればこそ、私たちは、
ますます多くの人々の支持を受けることがで
き、劇団の発展の道を歩むことができるので
あります。三ヶ年計画の成否は、大きくみる
なら、このように日本の運命をきめる二つの
道をしっかりと見きわめ、働く仲間の期待に応
える前者の道を着実に歩みつつけることによ
ってきめられるでしょう。

第二節 劇団員を五〇名以上にする計画

劇団をいま大中に増やすことの必要性は、
すでに第一章に見え通り、他のどんなことよ
りも重要であります。自主公演、中小公演、

さまざまな分野での活動、どれを増やすにし
ても活動する劇団員の数が必要です。けいこ
を充分に確保して、すぐれた舞台をつくるた
めにも、仕事が過重にならないよう配分でき
るだけの数が必要であります。

劇団員を増やす、つまり、仙台小劇場が量
的に拡大することは、三ヶ年計画の扇の要の
位置にありますから、われわれの努力の焦点
を、全てここに集中する必要があります。

五〇名以上という数は、三ヶ年後に実現す
べき一応のめやすでありますから、六〇名に
なっても七〇名になってもかまいません。か
りに六〇名としても一年間に一〇数名の期生
を修了させるわけですから、現在の指導陣だ
けでも充分指導できる数ですから心配いり
ません。五〇名としたのは、一期、二期の実
績を考慮して、一期二〇名の応募のうち、一
〇名の修了者が残ることを予想して出した数
であります。

注意してほしいのは、期生は二年目より一
年目、三年目より二年目、つまり、計画の前
半により多く修了させれば、それだけ早く劇
団が拡大し、しかも新しい劇団員の能力を向
上させることができ、活動の巾は早くひろげ
ることができるといふことです。計画の実践
にあたって、このことをぜひ留意して努力し
てほしいと思います。

(イ) 募集の方法

いままでは、劇団員の友人、職場の同僚を

誘うという方法でやってきました。この方法は、いちはん確実な方法ですから、これらからもいっそう努力して劇団員全員が実行することが必要です。

しかし、この方法は、より多くの人々に呼びかけるためには範囲が限られて限界があります。いままでも、私たちの力のおよばないところから数多くの入団者があったことをみてもわかるように、私たちの手のおよばないところに仙台小劇場に入りたい人はたくさんいるとみられます。こういう人々に入ってもらうためには、もっと一般的な呼びかけが必要です。この一般的な呼びかけが、いままできわめて不十分でありました。

劇団員募集のチラシをつくって、私たちが参加するさまざまな集会の参加者に呼びかけること、公演、職場演劇祭などの場合には必ず劇団員募集のP・Rをすることを忘れずに実行する必要があります。

仙台小劇場を支持してくれる団体、個人には、とくに劇団員募集の依頼をすることも必要です。

さらに一歩進んだ形態としては、例えば「仙台小劇場友の会」のようなものをつくり、さまざまなレクレーション活動、話し合いなどの場とし、仙台小劇場の公演をみてもらいながら、意欲のある人には、劇団員になってもらうようにすれば恒常的な劇団員の供給源になるばかりでなく、劇団の側からいえば、観客組織にもなり、創造上のエネルギー源と

なりますし、「友の会」に集った人の側からいえば、日頃交流親睦の機会のない人々にとって魅力ある場になるのではないのでしょうか。もし、こういう組織ができれば、とくに未組織の労働者などの場合、さまざまな「わかもものサークル」とはちがった異色ある仙台小劇場の活動のひとつになると思います。

(ロ) 期生教育の体制と教育内容

大量の期生が入団してくる場合に、それに対応できる充分な教育体制が必要であります。いままでは、實際上、活動の片手間に期生教育をやるという状態でしたが、これでは、りっぱな劇団員が養成されません。これからは劇団の重要な活動の一部として、確実に位置づけることが必要です。そのために、次のことが常に配慮される必要があります。

- (1) 活動計画のなかには、必ず期生教育が含まれること。
- (2) 運営委員会は、教育の進行状況をたえず確認し、必要なスタッフを必ず配置すること。
- (3) 期生担当者は、進行計画をきちんと立て、たえず問題を運営委員会に反映すること。

教育内容については、あれもこれもと欲ばることをやめ、必要を最少限のことを確実に体得するように工夫することが必要であります。期生教育の内容には、次のことを必要だと考えます。

- (1) 仙台小劇場の方針、活動内容を理解する。
- (2) 体操、呼吸、発声、物云う術（言語的行動）、身体的行動の基礎訓練
- (3) 脚本（戯曲）の文学的・思想的・理解力。戯曲の構造、主題、行動線を発見する能力。

第三節 中堅劇団員の養成

劇団員の増加に伴って、新しい劇団員を指導し、劇団の中核となって、活動を進める先頭集団として、少くとも三〇％～五〇％の中堅劇団員が必要であります。とくに、現在の劇団員は、三年後には、原則として、全員中堅劇団員としてふさわしい能力と資格を備えなければなりません。

中堅劇団員は、次のような能力と資質を必要とします。

- (1) 俳優として自主的に創造能力を発展させる努力を払っていること。
- (2) 第二節であげた期生教育内容を指導できること。
- (3) 俳優以外の創造分野の次のいづれかについて、責任ある創造能力を持つこと。
 - (イ) 戯曲を創作する能力
 - (ロ) 演出能力
 - (ハ) 舞台装置、照明、音響効果等の舞台制作能力
- (4) 仙台小劇場と劇団をとりまく情勢・演劇運動について広い視野を持ち、劇団の活動、運営の評価と方針をつくる能力。

(5) 劇団の規律を身につけ、集団のなかの自分をよく自覚し責任ある行動をとることのできる資質。

以上のような能力と資質を備えた劇団員を養成するためには、劇団員一人ひとりの努力はもとより必要であります。同時に自然成長性にまかせるのではなく、例えば「中堅劇団員教室」のようなものを開設して、組織的に養成をはかる必要があります。

とくに、(2) (3) (4) (5) は、今後活動量の増大に伴って絶対に確保する必要がありますので、(2) については随時、期生教育を担当したり、そのための研究会を設けます。

また、(3) (4) については、今後年一本以上必ず劇団内での創作制を上演することを制度化する。(3) (4) については、意識的に新しい人を演出に起用して、三年後には三十五名の演出者を養成することを目標にしたいと考えます。

第四節 劇団の規律

仙台小劇場は、たしかに業余劇団であります。単に趣味や自らの楽しみだけで演劇をやっているわけではありません。ゆえに趣味やたのしみのためにだけやるならば、私たちの好みにあったような人だけ集って、気のむくままに好きな内容の公演をやっていたら良いし、都合が悪くなったなら、いつでもやめてしまってもかまいません。

しかし、私たちは演劇をすることで、なんらかの意味で、社会的な意義のある仕事をしようと考えています。しかも、働く人々のなかのさまざまな分野での未来をめざす活動の重要な一環として演劇運動があり、その任務を担う劇団として仙台小劇場を考えています。したがって私たちは、どんな困難があってもその任務を放棄しないでやりとげること、自ら進んで自分への義務として課す劇団員の一人でも多くなることを望んでいます。そのように劇団全体として臨んでいます。

ここに、仙台小劇場の他の在仙自立劇団と異った特色があります。当然他の在仙自立劇団にはないある程度きびしい規律が要請されます。しかも、強制された規律としてでなく自覚された規律として存在することが要請されます。

仙台小劇場の自覚された規律の基本をなすものは、仙台小劇場の第三の基本方針、集団の民主主義による劇団活動であります。このことの内容については、「第五回総会資料」に詳しく説明されていますので、すでにみんな知っていることですからここでは触れません。

私たちは、この第三の基本方針の精神を、さらに実践的に強化する必要があります。劇団が大きくなり、活動が多岐にわたるとどうしても統一が乱れてきます。組織的にも個人的な努力としてもいまだ以上に綿密な配慮が必要であります。具体的にどのようなこと

が必要であるかは、折にふれて運営委員会から指示してもらうことにして、ここでは一般的なことを挙げておきます。

(1) 民主集中制になれること。

これは、基本的には、集団のなかに自分を最大限に生かすことです。実践上では、徹底的に自分の意見、経験、技術、能力、時間をできるだけ劇団に生かすように劇団に働きかけること。全体の総意でまいったことは、責任をもって実践することの二つの面をきちんと結合すること。

(2) たえず自分を高めるために努力すること。

けいこ場で身につけられることは限られています。それにひきかえ、身につけなければならぬことは無限にあります。劇団員として身につけなければならぬことは、次のようなことがあります。

○ 現実のなかから真実といつわり、美しいものとみにくいもの、正義と悪、未来をめざすものと過去へのひきもどすものを正確に見ぬ力(思想)

これは、社会科学の文献を学習すること職場や地域で行なわれるさまざまな民主的集会、活動に積極的に参加することによって身につきます。

○ 芸術作品(戯曲も含む)を正しく深く理解し、それを批評する能力。

これは、たくさんのおいしい戯曲、小説、詩文学理論書を読むこと。すぐれた芸術品(舞

台、美術、彫刻、映画、音楽など）に触れる機会をできるだけつくること。

● 演劇上の表現技術を高めること。

とくに、けいこ場で勉強したことの復習、反復練習、予習、体操、呼吸、発声などの長期にわたる系統的な訓練は、ぜひやるように心がけること。

(3) 劇団から与えられた仕事を積極的に責任をもってやりぬくこと。

これは説明するまでもないことです。劇団員に課せられた基本的な仕事は、けいこに参加することです。これを怠けたり、届かないで休んだりすることをまずやめることです。

劇団の実務的な仕事、対外的な活動（劇団の代表として他団体の会議、集会、共同行動など）劇団の独自活動の任務は責任をもってやること。

(4) けいこ場その他でその場の集中度を妨げるような行動をつつしむこと。

(5) 喫茶店、路上、その他の大勢の人の集まる場所で高声で劇団のことを話し合わないこと。重要なことはけいこ場、劇団員の家などで処理すること。

(6) 劇団の文書、プリント類を大勢の目に触れる場所に放置しないこと。

(7) 電話、郵便、その他の連絡は、受けとる人の環境や条件をよく考えて、迷惑のかけられないようにすること。

挙げれば、いろいろあると思いますが、

さしあたって以上のようなことを守るようになり、ここがけると良いと思います。

第五節 劇団運営の実務体制

劇団の発展に伴って、当然劇団の実務体制も整備される必要があります。いまのところ現在の運営委員会、創造委員会の他に新しい部門を設ける必要は感じていないと思います。ただし、その内部の任務分担、および各委員の選出方法、委員の数などについては、劇団の発展に応じてそれにふさわしいものに対応して行くことは必要だと思います。

運営委員会の活動については、経験を積み重ねてきたが、充実して来るでしょうが、三ヶ年計画の進行状況をたえず点検し、定期的にその成果と欠陥を総合的に明らかにして行くことを基本線としなければなりません。その意味で「劇団ニュース」は運営委員会と劇団をつなぐパイプとして重要性を増して来ると思います。「劇団ニュース」編集スタッフの充実が必要だと思います。

創造委員会は、期生教育、中堅劇団員養成を受け持つ重要なポジションであります。もっと機能的に動けるように、人員の配置、任務の分担などを配慮する必要があります。

第六節 劇団発展に伴う活動の展望

三ヶ年計画に基づく劇団の発展に伴って、私

たちの活動分野と活動の質は、大きく発展することが予想されますが、具体的には、その時の発展状況とわれわれをとりまく情勢によって制約されますので、一般的にその展望をのべるにとどめます。予想される活動としては

(1) 自主公演の年一〜二回の定期化、中小公演（各種集会、職場演劇祭、地方公演など）の増大。そのうちいくつかは劇団内からの創作劇の上演。

(2) 職場演劇協議会での創造上、運動上での積極的な活動

(3) 自立劇団、高校演劇部との提携、指導援助。

(4) 東り演での創造上、運動上、組織上での果す役割の増大。とくに東北地方での東り演の組織的拡大の任務の実践。

(5) 労演運動での貢献（劇団員の職場での労演サークルの組織拡大、労演の各種活動のなかでの積極的役割）。

(6) その他

第三章 むすび

この三ヶ年計画は、さきにも述べたように在仙自立劇団では、いまだかつて踏み込んだことのない新しい、しかも飛躍的な内容をもったものです。仙台の自立劇団ができては衰退し、再び現れてはかけをひそめ、いつまでたってもしっかり根を下した永続的な劇団に

成長しなかったのは、いま私たちがやろうとしていた段階に踏み込めなかったからであります。

それだけにこの計画は私たちにとても、仙台の演劇運動にとってもぜひ成功させなければならぬ重要な意義を持っています。すでにみてきたように、この計画実現にはかなりの困難が予想されますが、実現の可能性も充分にあります。この可能性を現実のものにするには、なんといっても、私たち自身の強い決意と全力をあげての実践によるよりほかありません。有利な条件を巧みに利用し、困難な条件には、慎重にしかも大胆にぶつかって排除しながら、着実に成果を積み重ねて行けば、必ず計画は実現されると確信します。この議案書は、そのための道標であり、劇団の、そして劇団員一人ひとりの成長を点検する設計図です。決して死蔵しないで、たえず身近におき、活動の指針にするよう希望します。

どんなりっぱな計画も、劇団員一人ひとりの具体的な実践を通してのみ実現されます。仙台小劇場の新しい時代の実現へむかってがんばりましょう。

一年の活動総括から

劇団静芸運営委員会

八先進劇団の誇りと自覚をたかめ、いっそう団結をかためよう！十八年の歴史をふまえ、激しい人民の歴史のテンポに合わせて、質量ともに、拡大強化のテンポを早めよう！Vのスローガンをかかげて二月十二・十三日劇団静芸第二十一回定期総会がひらかれました。総会は六・七期生入団者が圧倒的多数を占め、卒直で若々しい雰囲気の中、劇団一年の総括と六六年の方針が討議されました。昨年の総会（第十九回総会）に比して焦燥感もなく、活動上の幾多の欠陥・弱点をもちながら、確信をもって前進の方向が打出し得たと云えるとおもいます。討議は前向きな姿勢で「公演」「日常活動」「普及活動」「セントラル活動」の問題があるい展望をもって追求されました。幾つかの主要な問題について報告します。

一・「戦争か平和か」「侵略・生活破壊か独立民主か」の二つの道をめぐって米日反動勢力と人民民主勢力との闘いがこれまでに激しく斗われた一九六五年の特徴は、ベトナム侵略戦争反対・日韓条約反対の闘い、参院選都議選の闘いの中で示されたように働く人民の前進が急速なテンポでかちとられている

ことです。同時に私たちをとりまく内外情勢は追いつめられた米日反動のいっそうのファシオン化によってますます重大な局面を迎えています。アメリカ帝国主義の「強盗の論理」は事実によってその本性をバクロし、戦争拡大を社会主義中国にまでおしひろげようとしている。これに追随する日本の反動勢力は「ベトナム特需」に示されているように、侵略戦争に深く加担し、小選挙区制の強行によって民主勢力を弾圧し、世界戦争の火つけ役になろうと」しています。こうした情勢の中で、人民の歴史のテンポに合わせて、私たちの文化をいかにつくり出していくか、私たちが支えている人民勢力にこたえていくには劇団はどうしなければならぬか。思想・文化の面での激烈な闘いを人民の側にとっていっそう有利にするためいく上で劇団は一本のねじくぎとしてどのような役割を果たさなければならないか。

このような観点で一九六五年の劇団活動をふりかえってみると、その最大の欠陥は普及の面にはつきりとあらわれている。私たちは本公演小公演、カンパニイ出演で二万三千名という僅かな観客しか持つことが出来なかった。普及にもとづく創造という点でみれば、私たちはきわめて立遅れています。本公演において「つぶてとかがり火」を延期し、一年間に「ひとりっ子」公演一三〇〇人の観客しか持つことができませんでした。この原因は何か。劇団指導部が情勢を正しくつかみ、総合的・

全面的な観点に立つて公演を位置づけ、その成功を勝ちとっていく見通しをもつことが出来なかったこと、劇団が創造活動を中心に古い幹部も新しい劇団員も一つとなり、一枚岩の団結が勝ちとられなければならぬにもかかわらず、思想的一致のみが強調されて、方法の一致が軽視されたことから真の団結を勝ちとることができなかったこと。観客の要求にこたえるには私たちの創造的質の低さは覆うべくもないこと等々が考えられます。私たちはこれらのことを構成員一人一人の向上の要求に根ざして正しく解決していくなら、必ず前進をとげることとができるとおもいます。団結さえするならば私たちの前に不可能なことはないのです。

2 一九六五年の劇団

活動の成果はまず何よりもセンター建設とその果たした役割がどんなに大きかったかを正しく評価することです。私たちの組織的拠点である東日本リアリズム演劇会議は、ドラマ研究会、プロット会議、演劇合同セミナー、総会と重要な会議をセンターで開催したのをはじめ、県内の民主団体・文化団体の会議もあいついでひらかれました。センターは演劇うたごえの運動に大きく貢献したと云えましょう。働く者の熱い血のうねり・支援によって建設されたセンターは、全国の仲間たちに勇気と励ましを与えることができました。私たちはこのことを再確認し、センターを維持発展させることにいっそう奮闘しなければなら

りません。

いま一つの成果は、七期生の卒業公演「三家福」でした。発展する革命の要請にこたえて生み出された社会主義中国の民話劇風の一幕物語「三家福」はそのすぐれた内容、大衆的な形式によって観客をとらえました。七期生は大部分で初舞台でありながら、基本的に正しく「三家福」を上演し、県芸術祭で最優秀賞を勝ち得ました。これは「つぶてとかがり火」延期の困難な状況にあった劇団に創造的ないきいきとした空気を送り込みました。「三家福」はすでに四回上演された。しかも「三家福」を上演した七期生を中心にして「演劇は稽古場の掃除から」という真摯な創造の芽がめばえはじめています。

また「不知火」をはじめとする小公演活動の中で、の教訓（たとえ短期間の準備であっても最大限の効果を勝ちとるための努力の意義）うたごえとの交流の中で「つぶてとかがり火」の序曲「祖国」（作曲リ菅谷巖）が生れたこと、「つぶてとかがり火」延期総括の中で劇団十八年の歴史が戦後の歴史の中で跡づけられたこと、期生教育が軌道にのってきていること、人民の諸斗争への積極的参加等々の成果を数えることができます。

私たちは今年の方針と展望を次の様に考えています。

一・内外情勢を革新の立場にたって正しくとらえ、文化斗争の意義を深く実践的に学習し、いっそう団結して科学的法則的な創造

造方法を身につける。創造運動を中心に一枚岩の団結を勝ちとる。「延期総括」の学習。

ロ・普及にもとづく創造を重視し、一幕物小公演、児童劇公演やカンパニヤ出演によって広範な大衆の要求にこたえていく。「三家福」をはじめ一幕物レバを数本つくり出す。全員が朗読詩のレバを持ち、いつでも要求にこたえられるようにする。

ハ・演出部・文芸部・俳優部・美術部・経営部など専門部を確立する。特に演出部とスタッフの確立強化を緊急の課題とする。

ニ・集団の一人一人の自覚と責任の上にたって、劇団を質量ともに拡大強化していく中で、創作劇「つぶてとかがり火」の完成をいちとしていく。作家集団によって一幕物をうみ出していく。

ホ・創造・経営・書記の三委員会を中心に日常活動をいきいきとした充実したものにしていく。各委員会が任務と意義を正しく認識して系統的な水続性のある活動をすすめる。

ト・常任運営委員会（各委員会の責任者、運営委員長・劇団代表によって構成）を組織して集団指導体制を確立する。

※

以上をもとにして、三月末の「ひとりっ子」公演（市民演劇祭参加）四月初旬の「三家福」公演（伊東市観光会館ホールこけら落し）の成功をめざして活動をすすめると共に、東京芸術座にも大いに激励されて「つぶてとかがり火」の創作完成、六月初旬の本公演の準備

をすゝめることになっていきます。(文責・西)

現況と展望

劇団労働芸術劇場

昨年、劇団において劇団の体質改善、交流の核の確立、観客組織の拡大、交流、創作活動の強化、叫ばれ、その主要点を、今後の劇団発展への基礎とし、強力に押し進めるために、運営委員会、総会が再度開かれ、激しく討議されました。そして昨年の暮、十二月二十二日の最終総会において、討議の内容を集約し、六六年の劇団の展望として全体で確認されました。

☆ 劇団専従の確立

劇団の核となるべきもの——それは、劇団に専従を設置することです。勿論、専従を置いたからとて、劇団の核となるものが、完全に、全面的に確立したと云うことではありません。でも、それによって、劇団の弱点となつてゐる機動性が、かなり回復することは事実です。(二ヶ月間の成果として、事実が明確に物語っています。)

東京南部地域の文化状況、社会状況を一刻も早く掴み、それに対処して行くことは、劇団の発展条件として不可欠の問題です。昨年の劇団のように地域の文化状況に対して、常

に受身の態勢で対処するのではなく、その状況、条件に対して、常に斬新な方針と展望を確立し、行動を起して行くことが必要です。さて、劇団の討議において、専従設置の必要性は確認されても、「いかに」どうして」と云う具体的、実質的なこととして討議が進展してくると、討議は深まらず、行きずまり状態になります。専従設置の最低必要条件として、二万円の生活費、その他、交通費、交際費といります。劇団の討議の過程で公演財政からの捻出を考慮されましたが、公演ごとの赤字と云う現状では、それはできません。では基本財政からと云うことになりましたが、それも、現在では思ふようには行きません。

劇団の基本収入

団費	七〇〇円	計	一四〇〇〇円
他団体出演料	月平均	三、〇〇〇円	
隔月機関紙広告料	月平均	三、〇〇〇円	
総収入	計	一八、〇〇〇円	

毎月の支出

稽古場代	五五〇〇円
交通、電話、雑費	四〇〇〇円
参加団体会費、その他	一、〇〇〇円
隔月機関紙代	四五〇〇円
総支出	計、一五、〇〇〇円
残金	計、三、〇〇〇円

右記のような基本財政です。月々の残金は劇団で必要な事務用品、又、赤字公演の穴埋

その他で使いますから、結果的には月々ゼロと云うのが現状です。

そんな財政状態においても、現在の劇団に機動性をもたせるためには、専従設置は絶対に必要条件なのです。では、一体どうしたら設置できるかの問題で劇団は約四ヶ月間討議をしてき、その過程で提案されたのが、劇団員有志の共同生活で、専従の生活面を支えて行くという方法なのです。提案された、専従設置のための共同生活。なるほど、これは素晴らしい劇団としての理想案です。しかし、誰が、何処で、どのようにして、と問題が実際のな面になると大変なことです。でも、劇団専従の必要性から、この問題にぶつかって行くときこの案より他に良い解決策が無かったと云えます。

劇団員有志が討議を重ねて行く過程で、共同生活の理想案が、しだいに現実化されはつきり具体的条件として全員に提出されました。

○劇団員の庭に、事務所兼住居を建てる。

○共同生活者は専従を含む五名以上とする。

○お互いの生活は、総て共同して行う。

この共同生活案を、全劇団員が詳細にわたって討議して行く過程には――

△共同生活する団員たちの間で、思想的、感情的、人間的にうまくゆかず、劇団としてマインスを生む結果となるのではないか、△共同生活して行く団員が、劇団活動において尖鋭的になり、劇団の中に溝を作るのではないか、△

△独身者はともかく、夫婦の場合、子供が生まれたらどうするのかV 等々：色々な意見が飛びだしたが、△共同生活は総て、劇団を発展させることを基礎とする。V

△共同生活の中で生じるであろう、もろもろの悪条件は、お互に討議し、助けまじ合い、人間性を高める過程で克服して行くVと云う共同生活をして行く団員たちの発言を、全員が確認して、共同生活による、劇団専従設置に踏みきったのです。

さらに、劇団総会においては、共同生活する仲間を、全劇団員で支えて行くため、又、専従が十分に活動に従事できるように、劇団費の他に、専従維持費の捻出を決定しました。専従維持費は、劇団員が、酒、煙草、化粧代を節約して納入する貴重なカンパであり、劇団員の深い演劇への愛着と執念の現れたとさえいえると思います。

総予算二万円の建設資金のため、建物は古材を活用し、大工仕事は苦手と云う劇団員が毎日旺日集って、劇団事務所兼住宅の建設をしたのです。建物は十二月末に完成し、六六年の新年より共同生活が団員五名の有志によって始められ、進められています。

共同生活者たち△夫婦者二組、独身者一人計五名Vは、総ては、演劇文化の発展のために、総ては、我々の未来の社会を建設するために、を合言葉に、互いに助けまじ助け合いながら来ましたが、その中には、多くの困難、悪条件が横たわっていることを、

二ヶ月過ぎた今日、私たちは知りました。困難、悪条件をひとつ越えようと、又ひとつあり共同生活して行くかぎり続くとあります。でも、その困難、悪条件を互いに激論をかわしながら、一つひとつ克服して行く過程においてこそ、一人ひとりの劇団員が、演劇を観念としてではなく、身をもって、正しく誰れのための演劇を、いかにして創造して行くか、の課題と対決し、劇団員として、人間として生長して行くのだと思います。

☆ 南部の文化運動の核に

南部の文化活動は、非常に活発に進められているのに対して、劇団の昨年までの活動は逆に非常に不活発でした。劇団が南部の文化運動の進展と同次元で動かなかったし、動けなかったのです。そのことが又、公演時の観客動員に大きく反映しています。日常、観客との交流があまりやられていなかった結果として、観客動員にも反映しているのです。日常、観客と交流していれば、△二百円は高いV

△労芸は、まだやっているのかV
△労芸の芝居は、大衆から遊離しているV
等々・・・の厳しい批判は無いと思います。今日、演劇を一本上演するのに△二百円Vでは、とても大変です。それでも劇団としては、ギリギリの線まで入場料を下げ、より多くの観客大衆に、演劇行動を通じて、△泥沼の日

本社会、その中で果敢に生きる人間の姿、真実を不屈に守り闘う人間像Vそれら多くの真実を訴え、励まして行きたいと思っていますのです。

劇団が、日常不断に観客との交流を密にしているなら、劇団の様々の悪条件の中での演劇行動は、真に観客に理解され、協同して、文化を発展させて行くことができると思います。劇団として、その仕事をもっと深め、南部の文化運動の核としての役割をはたす必要を感じるのです。何故なら、弱くはあるが、劇団は南部を核として動こうとしているし、その中で発展してきています。その劇団組織の、長い歴史と体験を考慮するなら、南部の文化運動の核としての役割をはたす力を、13

たぐわえつつあると思うからです。現在の劇団組織をもっと拡大、強化して行くことは、南部の文化運動をより活発に、より前進させて行く役割と共に、南部の労働者階級の闘いを強化し、発展させて行くことにつながっています。

現在、南部の文化団体統一組織結成への動きが、三光労組支援集会の後の今日、非常に活発化されて来ています。

この他、劇団総会においては、左記のことも確認しています。

☆ 五月十三、十四日「朴達の裁判」上演

☆ 秋公演は創作劇の上演

☆ 小公演班の確立

☆ 東、り演、東働演、新劇人会議の積極的取組。

☆ 劇団の拡大、強化。

☆ 劇団労芸の後援会組織の再建。

☆ 機関紙の隔月化

劇団機関紙「労芸」新年号にのせた「六六六」を劇団飛躍の年に・・・ぼくたちの展望を劇団方針として再録発表します。

初春をかざる四月上演の「朴達」の裁判は新しい年を迎えて、本格的な稽古に突入、原作者金達寿氏の激励や好意に促されて、共同演出の萩坂、津村を中心に全員創造活動に意欲を燃やしている。「中略」劇団の専従者として荒井が活動することに昨年決定を見、今年から常任として活躍が期待されている。労芸旗上げ公演から三年目の今年、第五回公演を一大飛躍の契機とすべく、あらゆる準備がなされつつある。日韓条約批准阻止の闘い、ベトナム侵略反対の闘い、原潜寄港阻止、物価・重税・反対の闘いの中で、自分の足もとをみつめ、自分たちの生活と闘いをみつめて創作して行こうとする態度を打出して、第四回公演として構成劇人もえ上るベトナム解放の炎と一幕物「袋小路」の仲間たち「V」が創作され、上演された。問題の掘り下げの浅さ、芸術的消化の未熟さなどの弱点はあったけれど、こうした態度を押し進めていくことは正しいと思う。

秋は弱点を克服し、より高い水準で創作をという方針が出された。劇団全体がその創作過程に何らかの形で参加できるように、創作活動を全体でなしとげられるようなシステムで創作して行きたいと云うことが出されている。すぐれた作家を育てるためにも、創作劇を生みだしていく母体として、劇団の中に創作劇研究会が置かれるだろう。観客の要求に応え得る創作劇が、劇団で創造されなければ、自分たちの発言が生かされないし、劇団活動に対する本當の意欲も情熱も生れては来ないだろう。

昨年十一月、東京勤くもの演劇祭「東働演」に参加したが、今年もより積極的に参加しよう。職場演劇の発展を助成し、その質の向上のために、技術交流など、劇団の力を充分利用してほしい。又、東日本リアリズム演劇会議に対しての劇団の主体性を確立しながら、お互いの観劇交流の強化、稽古場交流などを深めることも進められるだろう。競演形式の合同発表会などが持たれるかもしれない。一幕物の競演でもいいし、合同の試演会などでもいい。そうした仕事の発表の中でこそ、お互いの自主公演での利害関係が相反しない観客動員に協力し合えるだろう。

東働演、東り演に積極的に参加すると共に、地域の文化発展にも力をさかねばならない。自主公演の成功それ自体、地域文化の発展になるわけだが、そのみでなく、集会用の多くのレバトリイを持つ小公演班が劇団に

もたれ、その活動を通して、南部の文化集団の統一した連絡組織を結成する仕事も、今年やりたい仕事のひとつである。これら多くのなすべきことを着実に前進させるためには、常任のたえざる努力に期待すると共に、劇団自体が強化されなければならない。

第四回総会から

弘前演劇研究会

二月六日、第四回総会を終りましたが、まずまず我々の仕事の重要さを認識し、かつその前途の多難さを切り開いていくには、会員一人一人の自覚は勿論、当面の任務を一つ一つ果たしていく以外に方法はない。

そして常に、我々は演劇活動の中で、八何をしようVとし、それが八何のためVになるのかを考えていく。これが総括の基本です。当面の課題として。

○ 三月末までに、会員一人が一人の会員を拡大する。

○ 機関誌「たんぽぽ」第二号（四月）発行。

○ 本公演の脚本の問題。（一案として）現在、朝鮮人差別問題をテーマ（半日本人「仮題」）に文芸演出班の仲間が脚色準備。

○ 小公演用レバトリイの問題。作間雄二作「津軽はか塗り」一幕（文化評論）の稽古に入る。

○弘前労働結成の問題。

三月創立総会にむけて全員とりくむ。

○学習として

米「東り演」の理解を機関誌を中心に。

米現体制下の「差別」について。

米「近代俳優術・上」について。

「第四回総会討議資料」から

△弘演研Vも、この三月二〇日で満三才になります。会員、また私たちを支えてくれる仲間たち、それぞれ、「もう三才・・」だ三才か・・」のいずれかの感慨を胸に抱くと思いますが、もう一つ「ひとつのヤマ場に来たな・・」の緊張感もピンとくるのではないでしようか。

確かに、三年めの今年はいままでにない、困難を厳しい年になりそうです。財政的にも・組織的にも、創造面でも、ある岐路に立つたといっても云いすぎではないでしょう。私たちは、今ここで自らをふり返ってみる必要があると思います。

演劇活動の上に立って、私たちは何をしてようVとしているのか、それが何のためVになるのか。そして、私たち津軽地方の演劇運動の歴史と、その伝統についても・・・(中略)

三才とは、嬰兒から幼児への足がかりです。幼児から少年への成長の、資質はこの時つくられるといえます。「三つ子の魂百までも」

といわれるくらいです。この三才児には天才教育はいりません。必要なのは素朴な自覚と、そこから出発する努力だと思えます。第四回総会において充分討議を深め、明確な明日への展望を身につけましょう。

一、公演について

◎ 本 公 演

年一回、秋の本公演が我々の原則のようになつた。それはそれでいいのだが、今後秋の一回の本公演を中心に、我々の演劇活動がすすめられるのか、どうか、再確認したい。というの、第一回公演は、そろそろ公演をもちたいという希望のあらわれであつたし、第二回はそれをなぞったかたちではなかつたか。今回、上演作品、その回数(例えば、青森五所川原、等での公演とか)の可能性とか、市民会館・中央高校の劇場の問題などの諸点をふくめて、充分討議し、明確な長期のプログラムをうみだしたい。

第二回本公演、木下順二作「山脈」は、実行委員会の素晴らしい活動で、観客動員目標七〇〇人は立派に成功したが、内容的にはかならずしも成功したとはいえない。次にその原因と思われるものを条書きしてみたい。(1) 前回「太陽の民」好評に、多分に自分たちの力を過信していたのではないか。

ギリギリ追い込みになればなんとかなる、と

いった・・・。

(2) 逆に、せっかく前回学んだ経験が、今回充分生かされただろうか。とり組みの計画のなさ、稽古日数の不足、演技者としての基礎力の不足、等、前回から殆ど進展はなかった。

(3) 演劇活動家としての各々、一人一人の自覚が足りなかつたのではないか。日常の学習が充実していれば、稽古はもっと進んだろう。(4) 以上をひくるめて、公演作品の選びかたに問題はなかつたか。

(5) 古い言葉だが、本質的な意味で「芝居づくり」についての認識の不足が解決されてい

ない。全員が一つ一つ、仕事の分担など積極

的ではなかつたのではないか。

(6) 業余劇団という空気から脱したい。

働きながら、のなかに并解の余地を残しそれぞれ、演劇活動という文化運動の線上に於ける自己の位置づけ(3)とは別な面での自覚が不足していたのではないか。できたら職場で組合でも、文化面での仕事を積極的に分担するとか。考えてみたい。

逆に、プラス面での問題として

(1) 一般の評価として、過去に舞台経験のない(第一回本公演は別として)演技者がある者より数段進歩しているといわれているがその創造上の問題。

(2) 稽古を公開したことで、活動家が育ち全

く演劇に興味を持たぬ人々が、積極的支持者になった、その理由。

◎その他の上演について

前年に引き続き、労働文化祭、歌ごえ、抗議集会などに、シネプレヒコール等に参加してきた。構成詩など創作もふえている。

だが反省すべき点を次にあげる。

(1) 横古が足りない。意欲が先だって、その内容が充実しない。

(2) 「その時は・・・」のように、しっかりしたレバにし得なかった。

(3) 例年、各々上演の機会はいそぎまわっているのだから、もっと計画的にとりくめるはずである。

○ 本年の展望としてのまとめ

前記した各々条の問題点を、一つ一つ発展的に今後我々の課題とすることによっておのずから展望が生れてこないだろうか。

特に、その他の上演についての問題と、その前の項の各々条とをひつくるための活動を進めるが、本公演の内容を高めることになるのではないだろうか。これは次項の基礎訓練にも充分つながることである。

長期展望も確かに重要であるが、それはそのものを置く、建設するための土台を必要とすると思う。そのために本年は土台づくりに努力しよう。そのために、本年の諸問題を、来年にけっして持ち込まぬよう、努力し

よう。

二 演技に必要な基礎訓練について

発足当初からの重要な課題であり、当然各自充分自覚している筈であるのに、体系だつて何もやっていない。勿論、中央の○○俳優養成所などのようにはいかなくとも我々なりに計画できたし、半歩づつでも積み重ねられてこられたと思う。

その結果、公演日のせまった稽古の開始前の短かい時間、発声の、滑舌のとあわててやっている。やる余裕のない者もいた。

ここでも前回の反省は生かされていない。

次に問題点をあげると。

(1) 演出班としても、長期の訓練の計画を立てておらず、かけ声だけに練習の重要性を訴えてきた感がある。

(2) 一方、演出班の提案の素材に対して、一応とりくんでみて、でなく何かしらの理由づけで中止、又は三日坊主的に忘れられている。今後の問題点として

(1) 長期の展望にたち少くとも年内の例会の具体的プログラムを作成する。

(2) 前述各項のそれぞれにも関連するがテキストとして、木下順二作「山脈」及び他一本（地域活動に適するもの）を選び、テキストから提起されてくる不充足の問題として、例えば、発声、行動、学習というように多角的

に例会をもっていきたい。

(3) 肉体訓練の諸指導は、千田是也著「近代俳優術」による。

(4) 特にこの項の問題は、批判及び反省が着実に生かし、克服されていかなければならぬのは当然であるが、原則としてこれは各自の日常問題ではないだろうか。

(5) 前年は一回に終わったが、今年は「朝野球」を、おいにやろう。

三 「東り演」加盟と各自その任務について

ついて

第三回総会に於て、「東日本リアリズム演劇会議」に加盟が確認されていたが、事務局の手続きがおくれ、せつかくの八月大会に16参加できなかったのは残念だが、本年は積極的に、東日本の、そして西り演をもふくむ仲間たちと、交流、連帯を深めよう。

そのために・・・

(1) 「東り演」についての学習を深める。

(2) 現在決められている「東り演係り」を今後、幹事会の一役とする。

(3) 会としてではなく、八弘演研Vの演劇活動家の一員として加盟し、各自会費として月十五円を納入する。

(4) 「東り演」機関誌を（隔月発行一〇頁）各自なるべく購読する。

(5) 八月の「東り演」第四回総会に、幹事会は勿論、一人でも多く参加しよう。そのため

のキャンパ活動をする。

(6) 津軽地方の各劇団に、「東り演」参加を呼びかけよう。

◎以上は、我々各自の任務として考える、そのことが結局我々の演劇の質を高めることであると思われるので、一人ひとりとり組努力しよう。

四 一人が一人の会員を！

(会員拡大について)

いま、二冊のパンフレットを目の前にしている。

『太陽の民』『山脈』と三年の歩みと成果がそのなかにぬり込められてある。創立された当初のことを頭のなかにうかべて見る。総会には三〇名に近い人達が集まった。生いきとした明るい展望と、未開拓の土壌に対する不安といりまじった、誕生の産声を発して、若いエネルギーが一つの目的をもって、進みだしたのである。

例会は、黙劇、詩の朗読と、基礎訓練を主に、動きはじめた。公民館の会議室を借りたり、個人の住宅などで、ぎこちなさはみんながもっていたが真剣にやって来た。

十八近くは、いつも参加して来た。レクリエーションも何回か行なわれて来た。その都度、新しい人も参加したが、仲間として、会に入会してくる人は、意識的な勧誘が稀薄であつたためか、大して、成果が上がりなかつた。

た。総会に於いて、組織の拡大が重要な議題として、とりあげられて、討議され、とりくまれて来たにもかかわらず新しい人がふえない、どこに主な原因があるのだろうか。

『太陽の民』公演時の連名は、二五名であつた。

「あらゆる機会を利用して、拡大を訴えて『公演』がもたれば、会員も拡大出来るのではないか」ということになって、第一回、第二回と、精力的に、役者として、裏方として、一人何役も引きうけてやって来た。

そして、『山脈』のパンフレットの連名をみると、二九名となつてゐる。数の上では四名がふえてゐるが、第二回公演を終わりたいま不当配転で中村、小山夫婦が、大学卒業で三名の学生が、一身上の都合で、小川、福士がそれぞれ実質的に活動できなくなつて、実際に活動出来る人は十名ぐらいしかいない。

尤も、第二回公演をおして、出演し、説明で協力し、観客として参加し、新しく入会してきた人も、例会を見学したいという人も出てきた。併し、秋の公演と、それへ目ざしての諸活動を現実に考えると、やはり会員の拡大が一番さきに、とりくまなければならぬこととして、浮び上がってくる。

一つの試案として、高校演劇部に対する(第二回の稽古見学にも多数参加していた)呼びかけ、大学の演劇部の拡大と併行して入会演研Vに入会してもらつた土壌をつくること。大胆に、労働組合のサークルに入つて行つて交流をふかめること。

意識的に、一人が一人の会員をふやしていくために、職場ではたきかけること。

二回公演したことで、大衆、とくに身近にいる人たちは、創立当初、集つた人達(全然演劇を知らず、只、ある意気込みを支えられて活動し始めた人達)のつくりだすというなれば素朴な雰囲気、変つて来ている。若干でも演劇的经验があれば入会できないというような印象を持つようになつてゐるのではないか。もしそうであつたらその壁は、我々自身の何かしらの間違ひからつくられたのではなからうか。

これを反省することによって、いわゆる初心にかえることがいま、必要ではないだらうか。確かに、公演を重ねるほど専門視される。一般的な問題はあつても、我々は常に大衆的立場を忘れてはならないと思う、そこから、あらたな、拡大の道が展かれてくるのではないだらうか。

又、例会の内容としても、新しく入つて来る人々に対して学習オンリーにならず、演劇的雰囲気忘れずに、今までの退めていった人達の原因をふり返つて考えてみようではないか。

五 機関誌「たんぽぽ」の発行と後援会

について

今日までの、大衆との接触、交流を考えて

みると、勿論ここでは劇場外のことではあるが、いたって数多くない。個人的にはあるとしても、△弘演研Vの活動をとおしては、年間、レクリエーションとか公演後の反省会程度で、しかも限られた人々である。それでいて、公演にかかれれば切符いかがですか、ある期間とびまわる。

又、いずれ後援会を、という声も聞かれるし、「東り演」及び地域の仲間たちとの交流も、一年の活動を通じて行いたいと思うので技術的、財政的にも困難な状況にあるが、機関誌「たんぽぽ」を隔月に発行して、大衆及び演劇の仲間と我々の活動を知ってもらい、交流し連帯をふかめたい。

そして、大衆の意見、批判を我々の活動の血や肉に吸収し、創造の質を高めたいと思う。後援会、それが公演実行委員会の主体となつてもらふ、等は以後の問題であるが、機関誌を買うことで、後援会員になるとか誌代が会費とか、の例を掲げてなるべく早く討議結成をお願いします。

今回、以上の目的のため、幹事会の決定で総会に対して事後承認のかたちになります。第四回総会討議資料を創刊号にした。

六 弘前労演結成の努力

(労演準備会から、三月創立総会へ)

県内三市で労演のないのは弘前だけ。青森

約二〇〇名。八戸、約六〇〇名。ほかに五所川原は労演はないが、労音特別例会として、民芸「泰山木の木の下で」関芸「小麦色の仲間たち」を上演している。

その中で弘前は昨年十一月労演準備会として「小麦・・・」をやったと取上げた状態である。

△弘演研Vは創立総会でその活動方針に労演の問題を取上げており、△弘演研Vとして青森労演の観劇は十回に及ぼうとしており、外部へ労演結成の問題提起をことある度にして来た。その中で我々の接した範囲では雪国十八座、黒石劇研の劇団は勿論、労音、民主団体、学校演劇部「太陽の民」「山脈」の観客、又芸協加入者の中にも労演を求める人達の少なくないことを知った。

そういう中で、漸く昨年、労演準備会として「小麦・・・」に取り組んだが、当面中心となつた△弘演研Vが、「山脈」。労音が「わらび座」(前者が十月二十五日、後者が十一月五日)その直後の十一月二〇日の「小麦・・・」である。実質活動期間二〇日間という制約の中で、二〇〇〇名目標で五〇〇名動員で留った。

「小麦・・・」での反省としては

- (1) 準備期間が短か過ぎた。
- (2) その為、事務局体制を含め、実行委を大きく発展させ得なかった。
- (3) 弘演研、雪国、十八座等、秋の自主公演の関係で、「小麦・・・」に集中できなかった。

た。

(4) 民主団体、労組、文化サークル等への、広く且つ、積極的に働きかけが不充分であった。

(5) 一般市民へのP・Rの不足。

等があげられると思われる。準備会としてはこれ等の反省にたち、五月の民芸「郡上の立百姓」まで、二月準備会、三月創立総会を目標に取組む体制を進めており、その中で我々としては「働きながら」働く者のための演劇活動の立場と、労演結成の意義とを理解し結合させる中で、その中心的役割を果たさなければならぬと考える。

「よい演劇を安く」のスローガンは受け易いが、労演は、劇団、民主団体、各サークル、町の商店などを含む、各種各層の活動家の足と、積極的行動がなければ出来得ないし、「小麦・・・」の経験をそこに生かして努力するなら、結成への足がかりは具体的につかみ得ると思う。又、我々創造活動に参加する者として、しかも現段階として、もっともっと良い演劇を観なければと思う。とすれば、現在地方に於て学び得る演劇は、△弘演V以外に観る機会はないと思われる。

七 財政について

第一回公演、第二回公演と連続して赤字であった。特に「山脈」公演は目標を越える観客を動員したが、それでも若干の赤字を出し

ている。だが赤字を出さないということのため、装置等を簡略にという訳にはいかない。公演の都度、財政上の計算を綿密に行ない、全会員が知っておくことが今後重要であると考ええる。

業余劇団であるといっても、財政的には創造目的として勿論、自立劇団であるという認識もより以上に必要な時になっている。現在、会費百円、他に特別会費（赤字補填金）百円を徴収している。しかし、納入率は芳しくない。省みるに、私達は財政について討議することが、あまりにも少なすぎるのではなからうか。活動を進めて行くうえで、財政の確立は非常に重要なことである。財政が原因で活動が停滞することは許されない。同時に少数の会員だけの負担で、活動を進めていくこともまた、正常な形態とはいえない。次の四つを今年の方針として財政の確立をはかりたい。

- (1) 会費の完全納付
- (2) 会員の拡大による安定化
- (3) 諸事業による赤字補填
- (4) 機関誌の独立採算制、及び「東り演」会費個人納入制

以上

＊機関誌 東り演・総括号

第五回合同演劇セミナー・第三回東り演総会、六五年八月二八・二九・三〇日・静岡演劇音楽センター

五〇頁 共一〇〇円

＊機関誌 東り演・創刊号

地方文化とそれからの文化・・・こばやし

ひろし

、六六年の展望・・・東り演一〇劇団

戯曲△傷だらけの天使△・・・黒沢参吉

八〇頁 共一一〇円

申込は

川崎市上平間一二七五

京浜協同劇団内「東り演」刊行所

郡上の立百姓・こばやしひろし作品集

△郡上の立百姓△の他に一幕劇△加波山△

△こわれないものはない△△ひずみ△及び

劇団はぐるまの歩みを収録

申込は

岐阜市西野町一

劇団はぐるま

東　　リ　　演　　の　　創　　作　　運　　動

山　崎　欣　太

一、創作劇運動は東リ演の大動脈

古今東西優れた戯曲は沢山あるが、いざ私たちが上演のためのレバを選ぼうとすれば、なかなか好適な作品は見つからない。百の劇団、上演集団が、それぞれ独自の性格や生い立ちを持ち、なによりもそれぞれ異った条件の観客を持っている以上、名作だからというだけで上演できないゆえである。

しかし戦后二〇年間、多くの劇団は今もってレバの不足をかこち続け、批評家は創作の貧困を叫び続けている。創作の必要性は明らかである。私たちが創作運動を支える考え方と、その道すじ手だてを明らかにしようと努力しているのも、創作こそ私たちの演劇の現在と将来を決定する重要な要素の一つであることを自覚しているからに外ならない。「創作上盛んに興れ!!」ということは誰でも云えることだが、その願望だけでは何も生まれて来はしない。

どうしていわゆる日本の演劇には創作が生まれにくいのか、そして創作が質量共に盛んに興るには何が必要なのか。どのように創作運動を展開するか。こゝまで考え、実践する能力があつて始めて運動になり得るのである。

どんな理屈をこねたつて書かなけりや仕様がねえや。これは事実であつて、とにかく書け。書いて書いて書きまくる。この情熱のな

いところは、あくまで不毛であることは当り前であるが、それだけで創作問題を片づけてしまふわけには行かない。幸いにして吾が東リ、黒沢、こばやし等の豊かな経験をもちた作家も擁しているし、弘前演研には作間雄二、仙台小劇場・瀬川竜夫、群馬中芸・風見鶏介、舞芸小劇場・勝山俊介、渡辺波江、川島洋一、東京土の会・山村金平、労芸・荒井敬亮、京浜協同劇団・黒沢参吉、城谷護、橘彌生、つくしの会・林節、静芸・小島マキ、会津梯一、山崎欣太、名古屋演集・丸子礼二、岐阜はぐるま・こばやしひろし、島源三、篠田康彦、等二十名近くの書き手が実際に書いている。その外、浜松からつかぜは石川安夫を中心に、三方原農民の斗いを書こうとしているし、変り種としてまだ一度も皆と交流したことのない名古屋新風の土屋稔もいる。たゞし土屋氏は果して東リ演の作家と云つていいのかどうか私たちが具体的な結びつきも連帯も持てぬまゝに三年を経たことは問題であるが。一度演集の若尾さんあたりに土屋氏に直接当たって頂く必要があるのではないだろうか。

さて、東リ演に関しては永年書き続けて来た作家を中心に新しい作家がどんどん生れ育つて来ている事実を、私たちは改めて着目しなければならぬ。これは普及と創造の理念によつて結果した東リ

演のもたらしたプラスの面である。なにか創作部会を当初からもうけ、創作の質量共の発展を目的意識的に努力したことの正しさが証明されたように思う。だが何よりも創作が生れ育つ基盤は、それぞれの劇団の日常の劇団活動にあるのであって、東リ演に二十人もの書き手を擁している事実は、それぞれの東リ演結成の趣旨でもある。それぞれの独自性を尊重し、地域の働く人々と密着し、それらの人達のあまたの要求や斗いに従い、共に闘う姿勢を堅持しつつ活動してきた結果に外ならない。まだ不充分であるかも知れないが、闘う演劇の革命性と、その裾野の広範な働く人々の希いや心を有機的なビラミッドの形で捕えようと努力してきた東リ演加盟劇団の実践は、普及の中にこそ現われているのであり、切実な創作への要請、突き上げも、東リ演の創造普及の姿勢が生んだものに外ならない。

ここでは大切なことは、二〇人の書き手たちが生れ育ってきたこととはやがて四〇人も八〇人も書き手が生れて来る可能性として東リ演は存在するし、存在しなければならぬということである。もし東リ演を結成しなかったならば、黒沢さん、こばやしさん、等は依然として劇団に支えられて書き続けたことではあるが、それとてひとり立の作家であるとしても東リ演結成の前とあては当然質量ともに変化せざるを得なかった、というより右の作家たちはその属する劇団と共に、東リ演結成に指導的役割を果たしている事実を見たとき、東リ演の意義は自ずと明らかになる。二〇名の書き手は東リ演なくしては生れ得なかったし、今後東リ演の創作劇運動が日本人民の広範な演劇文化に与える大きな使命を考えたとき、創作運動の質量共の向上発展はひとえに一人一人の東リ演の会員の肩にかゝっていると言っても過言ではないだろう。

私たちは創作運動の向上発展のために創作部会という作家たちの

集団による組織を持っているが、以上述べた様に作家の集団や作家個人のみのいわゆる「主体性」だけ切り離して見ても向上発展の保証は得られない。それぞれの劇団の創造普及の質と量が作家を生み育てる母胎であり、すなわち一日としてたゆみない劇団の日常活動の大众的普及にもとづく向上の中に、作家をいかに生み出し育てるかを位置づけなければならない。

戯曲形式の小説ならいざ知らず、戯曲は元来上演のための台本であり脚本である。上演によって始めて客観的に評価され、作品の価値が決定されるものである。すなわち上演という手段で観客の中に入り、観客から返って来たものが作品の実質であるという厳然たる事実には私たちの運動の本質があるのであって、作家の主体性もこの事実を眼をそむけて形成されて行ったならば、不毛な芸術至上主義とか、独善主義の迷路に迷い込んでしまうだろう。

例えばこばやしさんが「私はあくまでもはぐるまの為に書く」と云われることは、偏狭なセクト主義ではなく、現実にある岐阜の観客のために劇団はぐるまがこばやさんの作品をはぐるまの上演として肉化してとどける。そして返ってくる。この普及と向上の運動の中にのみ作家の生命のあることの実感をこばやしさんは云っているのだ。東リ演の作家たちは皆その様に仕事をしている。その様な在り方を誰も否定はできないであろう。

これも創作部会でこばやしさんが云っておられたことだが、さる関西の理科系の大学を出た秀才が東京に出て来て戯曲作家の勉強を始めたと言う話。高名の劇評家に作品ができると見てもらう。そしてこれでよしと云われたら、有名劇団に上演してもらうために次々門をたゞき続けて歩くというわけだ。こばやしさんは「もったいない」と云った。

資本主義社会は芸術をも商品化してしまつた。だから劇作家が世に出るには売り込むという方法しかない。懸賞募集も、云うならば売り込むための一種の市場であり、見本市である。良心的な作家たちはその中で生きるために血の沁むような苦勞をし、矛盾に苦しんでいる。既成の新劇も例外ではない。職業化を闘い取るために血みどろの苦闘をし、矛盾にせめき合いをまわっているといつても言い過ぎではないであらう。だから勞演はその優れた人民のチエと活力で、新劇に新しい養分を注入し支援している。この力なしには職業化の道を歩まざるを得なかつた既成の新劇は泥沼におち込まざるを得ないのである。

どうして日本の新劇には創作が生れにくかつたか。それは創造の源泉である大衆と劇団の關係が、好むと好まざるとにかかわらず売り買ひの冷めたい關係に変化しそれを買ひ得る階層に固定したことが原因である。その關係が軸になり、上演される作品には勢い權威を持った作品が要求される。だから中には極めて高い内容をもつた優れた作品もあるが、それさえ限られた普及の中で、作者に再生産のエネルギーを与えるような、活き活きとした大衆の息吹きでは返つてこない場合が多い。優れた作家ですら寡作になり、その向上は必ずしも保証されない。いわんや新しい作家が育ち試される機会は極めて稀である。創造の源泉を飲むことも拒否されている場で、どうして作家が育ち得よう。かつて優れた職場作家であつた二、三の人が、ある新劇団にかかえられて厳しい職業作家の道を歩み始めた。五年、十年、今のところこの大胆な試みは決して成功したとは云えない。むしろ劇団が必要としたヴァイタリティーは涸渇し、専門家にしづなればなる程、彼らの希ひは遠のいたというより、待ちこがれていた觀客の期待は裏切られた。しかし今私たちはこの貴重を試

みに感謝しなければならぬ。人民の作家というものは、何を養分にして育つものであるかをこれ程、明確に教えてくれたものではない。しかし私たちはこのような試行錯誤を冷笑するものではない。既成の新劇の努力は日本の演劇の中心の力として今それを支える勞演が育つことのできる程の貴い仕事をやりとおして来たではないか。

だが、今後職業化を成立させる為の複雑で矛盾に満ちた闘いの中で、今のところ勞演はまだまだ新劇を食わせることはできないのだが、新劇団は勞演が強大になることに出来る限りの力をそそぎ協力することこそ、本来の仕事であることを忘れて欲しいと思う。

或る劇団の人は勞演について勞演はやつと十萬足らずだし、自分達の觀客の一部に過ぎない。私たちにとつてお客さまである云うことは勞演であらうが民演であらうが、日生劇場であらうが同じで、わけへだてはしないという考え方で、勞演の性格を正しく見ない人があることは残念に思う。良い演劇を見て、向上したいという民主主義的な權利を行使するといふ誰が見ても当然の文化を享受する權利すら、斗いとり守り抜くといふ決意なしには行使し得ない事実から、勞演という民主主義的な組織が斗いとられたのだ。

一人一人の切実な要求に基いたサークルを基礎とした勞演組織は、自らを守り、日本の文化藝術を守り抜くために全国的な結集を闘いとらざるを得ないといふ必然的な道を歩んで来た。すなわちその第一歩から米日反動の政治支配、經濟支配、思想文化支配と対決せざるを得ないし、その事実から片刻でも目をふさいだならば、どういふことになるのか目に見えているのではないか。だから勞演の選ばれた役員達は一人一人の要求を大切にするためにサークルの民主主義的育成に糧食を忘れて努力し、質量共の飛躍的拡大を闘いとる、決定的な力を持つことが、民族的民主的演劇を發展させる唯一

の道であると確信し努力しているのである。

この本質的な点での協力こそ、劇団側の当面の努力目標ではないだろうか。現実的に云って今すぐ多くの劇団にそのことを望むことは困難であろう。又それが故に強大な労演を一日も早く斗いとする必要があるのだ。昨年、名演が全国労演にさきがけてはぐるまの「郡上の立百姓」を例会にとりあげ五千六百三十五名を組織した。これは最大の動員であり、労演が強大になる為にはどのような例会が必要か、又広範な日本の働く人々や青年がどのような上演を要求しているかを示唆している。これが既成の劇団に与えた影響ははかり知れない。

私たちの立場から眺めた時、東リ演の拠って立つ場から生れ出た最高水準の示した意義を深く考察し、私たちの中から生れてくる創作の日本の演劇における重要な位置を自覚する必要がある。私たちは東リ演の結成が労演と共に、必然的な発展的な道を斗いながら歩みんできたことを自覚すると共に、これから東リ演に拠って、それぞれの拠点に深く根ざし、働く人々の生活と希みと斗いに堅く結合した創作を生み出し、たえまなく普及の仕事が続けることの重要さを再び確認しようではないか。東リ演の普及と向上の路線を守り前進しつつける中で、私たちはいい作品を沢山生むことを一層目的意識的に努力をしようではないか。私たちはこの方法に立つ以外には一つの作品も生むことができないし、今やその仕事をひきつづき発展させることは日本の演劇にとって大切な役割を果すことになるのである。

始めに「創作の必要性は明らかである。」と断定し、何らの説明も加えなかったが、自明のこととはいえ、この日本の働く人々の日常の糧として斗う武器として役立てる目的をもった東リ演の加盟劇

団が、それらの人々の中から作品を取材し、返すという仕事の基本になることは当然なことであり、創作して上演するという活動スタイルこそ私たちの永年の目標だった。今やその目標は現実のものとなり、一定の開花を予測することの可能な運動の蓄積を持つに至っている。演劇史を思い浮べても劇芸術が一定の開花をする必須条件は、いわゆる演劇を成立させる三つの要素である観客と劇作家と俳優（劇団）相互が有機的に結合し向上し発展する血の通った関係を持続的に展開する力を斗いとり、或は基盤を持った場合に限られる。

現在労演運動は労働者階級を軸にした積極的な観客運動によって新しい時代の劇芸術の開花を目的意識的に創り上げる見透しをもって来ている。東リ演は地方劇団が中心になって地方の観客と共に創作し上演し開花の条件をかちとってきたように思う。二つとも日本人民の歴史的な斗いが生んだ独創的な新しい演劇運動の形態であり、二つとも日本の民主主義勢力の斗いの発展と切り離すことができないのが特長である。日本演劇の民族的民主主義的発展のために労演運動と東リ演の運動とは切っても切り離せないものであると私たちは見ている。共にそのスタイルは大衆路線であり、共に支え合う意味は大きい。本当の仕事はこれからである。

働く人々のための働く人々の演劇創造集団である東リ演にとって創作劇上演運動は動脈だから働く人々の日常の糧になり、斗いの武器になる創作を系統的に目的意識的に質量共に向上発展させることは中心的な課題である。

二、創作部会について

私たちの創作部会も、去る二月十九日・二十日静芸の稽古場で、ずっしりと重い運動の蓄積を持ち寄って第三回目の集会を持つことができた。第一回第二回は不馴れであることも手伝って、会議の目安がなかなかつかなかった。第一回の六四年度の部会はこばやし・ひろし氏の基調報告に始まり、六三年度に上演した東リ演内の戯曲を合評するという形式で開催した。総て初めてなので各劇団は決められた通り戯曲の討議をそれぞれにまとめて提出、それに基いて報告し合ったが、戯曲の評価を簡条書にまとめたものは無責任で無意味だという批判も出たりした。だが、予め各劇団が本読みやまわし読みで一部宛しかない本を努力して読み合い話し合ったことの意義は大きかった。初めて兄弟劇団にふれ深い関心をもち、今後の自分たちの運動のあるべき姿を概括的に把むことのできたことは成果であった。印象的に記憶している部会の特長的な内容としては、舞芸小劇場の「部品」についての評価の対立意見、「陸橋」の創作、改作過程の報告と問題点、こばやし脚色の「ひとりっ子」の上演の活き活きた報告に基づく「母もの」論争等であった。

第三回は引き続きこれと云って創作部会の持ち方を改善する方法も時間も持たないままに同じ形式を踏襲して行われた。基調報告は私が行なった。内容を簡単に云えば東リ演の各劇団が実践している所の劇団の創造普及活動に導かれて創られた人民的演劇の創作方法と、進歩的ではあるがいわゆる個人作家的修業で創られた創作の比較分析の報告で、その実証例として丸子さんの「人間が斗うとき」と菅竜一氏の「女の動行」により、人民的創造の優位性と必要性を力説し過ぎたのか、反駁も二、三あった。一回目もそうであったが、台本が揃わず、参加者の中には三四年度の戯曲全部読んでいない人

がいたために、二回目も発言者が片よったが、郡上一揆の成功、丸子さんや栗木さん等の新しい書き手も加わり、創作も運動らしい目的意識性がより加わって来て、多くの人を励ました。又二年を経て、お互いに交流も深まり、気心や性格もお互いにのみこんで、言葉面から来る話し合いの対立や、息苦しさ等も次第になくなって来た。

二回共に書き手を励ますことができて、この中から何人かの作家が生れたことは、創作部会の運営に種々の問題があったとしても、その役割は立派に果たしてきたと見るべきであろう。又二回目は小形式の作品を集めて、作品集をつくる提案が具体的に出されたり、一幕物をどんどん創って行くことの重要性が提案された。そして何よりもお互いの芝居を成るべく見ること、新しく生れた戯曲は必ず各劇団に送ること等申し合せを行った。

今回(第三回)の創作部会を開催するに当っては、今迄の中途半端なものを失くすことが強調され、創作部会は東リ演の作者並びにこれから書こうとする人々を対象に行うことが先ず決定された。勿論、深いかわりのある演出者や、その他希望者の参加は歓迎するが、創作部会は東リ演に創作を向上発展させる為の作家の専門的集会であることが確認されたのである。三五年に発表された戯曲の討議は、総花式を止めて、それぞれ本も行き渡っている、こばやし・ひろし「書けない黒板」黒沢参吉「傷だらけの天使」と一幕ものの重要性に鑑て、瀬川竜夫(仙台)「芽ぶき」を集中的に討論することに決め、討論に先立ってそれぞれの作者が報告することになった。更に重要な決定は創作部会は戯曲研究会だけにと足りるとするだけでなく、東リ演運動の普及に際して、創作部門としてこれを促進し、より拡げるための政策的討議と申し合せも行いことが決められ

たのである（六六年一月九日の運営委員会に於て）。その後、私たちが最も注目していた舞芸小劇場の「黙秘」改題「この武器を敵にわたすな」、が文化評論三月に掲載されているのをみて「シマッタ」と思った。六五年度において最も輝れた活動をした劇団の一つである舞小のこの作品を創作部会で積極的にとりあげる努力をするべきではなかったか。しかも文評出て時期はよし、みんなが充分に読んで参加することができたのである。一般にやゝもすれば運営劇団外の動きは充分に集中しないきらいがあるから、お互いに気をつけたと思う。

事前に運営委も持つことができて、今度の三回目の創作部会はかつてなく充実し、今後の方向についても種々とり決めることができた。

今回の討議の特長的な点は、作品を三つに絞って集中的に話し合うことができた点と、それぞれの交流も深まり、作品について作者について相当掘り下げ、突込むことのできた点である。作者自体の報告から始まったことも、先づ学ぶところから入ることができて、多くの書き手にとって参考になるところが大きかったと思う。三者の報告には「その作品を、どの様な動機で書いたのか。どこに力点を置いて書いたか。」が明らかにされていて、それだけでも大きな収穫だったと云わねばなるまい。東リ演なればこそ、作家研究もこの上なく有利に、戯曲をきめこまかく理解することができるといふ、向上発展のための大きな利点である。

又その他の書き手たちの、三作品に対する質問、追求、疑問も総て本質にふれるものであり全員が己自身を深くたしかめ合うこともできた。更に東リ演らしい長所として、「では、上演に際して、そ

の点を観客はどのように見たか。どのように批判したか。どのような反響があったか。」という自分たちの観客の感じ方、考え方で確かめて行くという、東リ演の気質があらわれ始めてきたこと。それが実質的に討論の節を為し、今後も更にこの点を意識的に位置づけを行ったら、更に盛りあるものとなるだろう。

討論の中で特に問題点として、将来に残されている点としては、「作者の個性、癖、特長とそのプラス、マイナスについて。」「典型的に画くという問題の中に、微妙な相違があるのではないか。と云うこと。」前者では黒沢さんの体臭という意見が出た。後者ではこばやしさんが組合員の中でも最も中核的な活動家はわざと出さなかったと云えば、この点で丸子さんは若し出していたならもっと書けない黒板は力強いものになったのであろうと云う。これは矢張り「典型について」の問題として提起してもいいだろうと思う。

黒沢さんの作品に感じられるという体臭の問題については、その他の黒沢さんという作者のもっている特質を、誰かがその処女作から「黒沢参吉研究」という本格的な勉強を「東リ演機関誌」を通じて出す必要がある。つまり一日や二日の話し合いで総てを解決しようということ自体無理なのであって、創作部会で出た問題で、東リ演の創作運動の質を高めるために重要だと思える問題を必ず意志的・精力的に追求し、将来に役立てる。じっくりした仕事として発展させることが大切なのだ。第一回第二回では私などは、早く結論を出そうとする主観的な誤りを随分出してきた。直ぐ結論のせる問題と、充分な準備と調査と研究とじっくりした仕事で始めて発展する問題があるのであって、創作問題は後者に属する内容も多いことを今度

じみじみと知ることができた。
最後に創作運動を質量共に発展させるために次の提案と申合せが行われた。

東リ演がそれぞれの拠点における民族的民主的演劇の発展を闘いとり、それらの権利を守る先頭に立つ責任を持つ以上、創作の上からは先ず広範な要求に応える重点として、作品難に悩む学校演劇、職場演劇、青年演劇に上演してもらう一幕ものを沢山創ることである。「果ばなれ」「芽ふき」の意義は大きい。

又私たち自身、労働運動、平和斗争、各民主団体の飛躍的拡大を必要とする現代にあって、短時間で芸術的感銘の深い今日の作品をどんどんそれらの集会で上演し、斗う武器として役立てることを要請されている。私たちも珠玉の一幕ものをどんどん普及することを私たちの活動の中心にもと据える必要があるのではなからうか。この点で舞芸小劇場は先進的な役割を果たしている。「一幕もの生産運動興れ!!」と云う以上の趣旨が部会で全員の賛成するところとなった。

一幕ものの創作を一本の柱として重視しよう。どんどん書こう。一幕ものはその普及と向上の中で、人民の斗いのテンポに遅れず、その要請に適合し、高い芸術的向上を保証するだけの必然性をもっていることが強調された。

中・小労演を強化しプロットを強化するにも役立つのである。

又、創作部会の意義の大きさから、来年度を目指して、東リ演作家会議という独立した機関として発足すること。

しかしかかる機関は実質的に自然成長では獲得できないから、来年度までに各ブロックが独自のプログラムで創作部会を組織すること

とが申し合われた。今年も又改めて、作者が責任を持って、各劇団に、新しくできた作品を送ろう。日常積極的な交流の必要性も申し合われた。

一幕ものは必ずしも一幕ものである必要ないので、軽形式、シュプレヒュール、ヴァライテーも短い作品としてこの中に含まれていると見られたい。

＊ 二月十九日、静岡でひらかれた運営委員会は、本年の東リ演総会・合同演劇ゼミナールの日程を次のようにきめました。

第六回合同演劇ゼミナール

八月二〇日(土)夜→二二(日)夜 (一泊)

第四回東リ演総会

八月二二日(月)日朝→夜

会場・静岡演劇音楽センター

＊ 機関誌「東リ演」に若いなかまの発言のための「ひろば」欄を設けます。第3号(五月一日発行)から、ひろばびらきをしますから、全劇団から毎号一人づつつまり15篇の原稿をおくってください。フダン着にくつろいだヤツも、肩いからしたケンカごしも大歓迎。第一回(切)四月一〇日・一二〇〇字。
＊ 舞台評を機関誌に集中してください。隔月刊といえ、ぼくらは強力な言論の場をもったのです。なかまの舞台批評、観客のよせたぼくらへの批評、創造にグサリつき刺さるパンチのきいたのをドンドンどうぞ。

とらいとつぽす

素朴な疑問のいくつ

「名古屋演劇集団「キューボラのある街」をみて」

てくのぼりの会 池田 博

名古屋演劇集団の「キューボラのある街」三幕六場八原作・早船ちよ・脚色・蓬萊泰三・演出・若尾正也Vをみた。これは十二月二日こども劇場として名古屋市公会堂で上演されたときと、今回一般公演として上演されたもの八二月一日於市公会堂Vと、二回拝見する機会に恵まれたにもかかわらず、今、こうしてその観劇記を書くことになっていると、何かその印象が稀薄になつてゐることに気付く。

しかし、この戯曲は昨年十二月四・五の両日に我々「てくのぼりの会」でも第五回本公演として上演してゐる上に、公演当日には演集からも若尾氏はじめ劇団の多数の人達に観ていただき、幕をおろしたすぐ後その場で交流会を開き、種々示唆に富んだ批判や演技者同志の創造上での貴重な意見交流がなされ、更にまた、稽古期間にも同じ戯曲を同時に取組んでゐるという事で我々の「キューボラ」が立稽古に入つたこの演集のキューボラ組の人達との間で稽古場交流ともいふべきものがもたれてゐるという、いわば因縁浅からぬものがある。しかし、その浅からぬ関係というものが、逆に演集の舞台を客観視する眼をくもらせ、

いきおい我々の創り上げた「キューボラ」の舞台成果との比較でしか観劇することが出来ない状態にあつたことを今、自認しない訳にいかないのだが、創立十七年の歴史をもち今や名実ともに名古屋での指導的位置にある演集の舞台と発足以来ずっと五年という我々の舞台との比較などという無理と無礼を承知の上で、二回拝見した舞台に対する、いわば素朴な疑問の一端を記して観劇記にしたいと思つた。

まず十二月二日のこども劇場。幕開き、プロローグの音楽、スライド映写（カラー、スライド、美しい）による導入部から、幕ごと場ごとの転換のスムーズな運びの良さはさすがだと大いに学ぶところ多かつたが、しかし全体的に平板で今一歩盛り上げるべきところでのアクセントに欠けてゐるようであつた。演技面でもことにタカユキ・サンキチが役の年令とのハンデを意識し過ぎていたためか、動きが必要以上に戯画化され誇張されてゐて、素直に入つていくことが出来なかつたし、ジュンをはじめ辰五郎一家の家族的な雰囲気も薄く、ことに大切なジュンの変化する過程も表面的なものに流れ明確に伝わる強さを欠いていたようだが、この時の上演では辰五

郎役の事故による配役の急變更とか、稽古日数の少なさ、等々に原因があるのではないということでは今回の八二月一日V一般公演では更に練り上げられ高い密度あるものに変化してゐるであらうという期待をもつて会場へ足を運んだ次第です。それともう一つの期待は、この演集公演でジュンとサンキチ以外はみなダブルキャストが組まれていることで、今回はこども劇場とはちがつた構成メンバーでみるのが出来るのではないかという点でしたが、残念ながらトミ以外は前回のこども劇場と全く同じで予想に反したのでしたが、しかし、トミ一人を入替えるだけでジュン一家の家族的な雰囲気が変わつてゐたことは確かでした。しかし、それは主に演技者のキャラクタから来る相違であつたのかも知れません。とは云え、正直にいつて今回の公演迄にどの様な経過があつたかわかりませんが、少なくとも、さらに厳しい稽古が積み重ねられてゐると思ふことは出来ませんでした。

舞台成果に完全無欠のものがあるはずはなく、同じ戯曲とは云え演出が異なり、ひいてはその演技表現が異なることは当然すぎることであり、思うのですが、まず第一に今回の上演に接して最も疑問に感じ、最後まで気にかゝつたことのひとつに、演技者の発声の問題があります。それは演技者ほとんどの人の必要以上に力んだ発声です。あれだけ怒鳴つてゐては第一に観ていて非常に辛く不快ですし、演技者同志の交流、または、個々の演技者の内面

での、ことばハセリフVの生まれてくる以前の
の肉面的な充実感と必然性が、かき消されて
しまつて、結果、それが表面的な類型表現を
生むことになっているのではないかという疑
問です。表現それ自体には、それともなう
技術的な面が、表裏一体、結びつき、含まれ
考慮されなくては行けないということは理解
出来るのですが、ことに第二幕二場の幕切れ
ジュンが野田先生の励ましのことばとそれに
便乗する辰五郎のことばで「あたしも、み
んないやだよ」と叫ぶところなど、ト書きに
よれば「突然泣き叫ぶ、吠えるような呻きと
共に」とあり、そのような力演になつてい
たことは確かですが、肉面的な充実感が薄く
あまりにも、唐突過ぎ類型的な面が強くて真
実感をもつてこちらに這つて来なかつたよう
です。これは、この場面がちやうど第二幕第
二場の幕切れでもあり、ことに、その感を強
くしたものかとも今考えているのですが、と
いうのは、これもひとつの疑問としてあるこ
となのですが、幕切れ、場の終りにその様な
演技表現が顕著にみられ、これにも大いに疑
問を感じたのですが、何か、幕切れを意識し、
計算した誇張がみられたことです。

第二場の幕切れ、辰五郎を明るくおくり出し
たジュンとタカユキは深呼吸をし、互に顔を
見合せて、大声での哄笑で最後の幕は降りて
くるのですが、この哄笑には、どうしても違
和感を感じない訳にはいかなかったのです。
次に音楽使用についてですが、我々の場合
は台本の指定通りではなく、音楽がない方が
その場の真実感を生むのではないかという立
場から、テキストレジャーを加えて、かなりそ
の音楽使用を削除したのですが、演集ではむ
しろ台本の指定に忠実に音楽が使用され各幕
各場ごとのつなぎでは見事に使用され、生か
されていると感じたのですが、しかし、ヨシ
エからの手紙を読む場とか、克巳とジュンの
場では、音楽による 情性が強く表面に出て
甘く処理され、流されてしまつていたきらい
が、やはりあつたように思いました。
しかし、この戯曲では、確かに、原作にな
い、克巳とジュンの関係、音楽の挿入の多さ
など、この様に描かれるべく書かれていて、
その点ではこの演集の舞台は戯曲の忠実な表
現に努めてあつたとみるべきなのかも知れな
いと考えています。

衣装についても、ことにジュンの真赤なセ
ーターの鮮やかなことや、北朝鮮へ帰る日のヨ
シエのチヨゴリの鮮やかな色彩は、川口の現実
へとくに川口でなくとも良いとは思いますが、
そこに生活する。貧しい辰五郎一家の人達の
暮らしや、両もりのする朝鮮人部落に住むヨ
シエのおかれてある現実を曖昧なものにして
いると思う。
装置の点では、広い市公会堂ほとんど一杯
に辰五郎の家がくまれ、さすがに立派な出来
ばえなのには感心したのですが、長屋の一軒
としては、いささか広く、大き過ぎるのでは
なかつたかという印象と、キューボラのある
街を表現したキューボラのトミオが、沢山に
あり過ぎ、視覚的にも今少し整理される必要
があるのではないかと思ひました。
全体的に印象が稀薄に終つたことの大きな
原因のひとつとして、正直に書くとなれば、
それは、技術的、職人的に作業が進められて
いるという面が強く作用しているのではない
かという点と、今や一七年の劇団歴をもつ演
集自体の中にその様な作業を無理に強いる。
そうせざるを得ないような要素が大ききど
かに棲息しているのではないかという疑問で
あり、もうひとつ、この上演が決定したとき
に、明確な観客のイメージがあつたのだから
かという疑問です。
印象の稀薄さと、リアリティの薄さという
問題のいくつかも、つまりはその辺のところ
から発生しているのではないかと考える次第
です。基本的には同一の創造をめざしてい
るはずの演集の舞台に、以上のような創造上
に異質な点を認めざるを得ないということは
やはり、今后にひとつの課題を投げかけてい
るのではないかと考えます。
勝手な疑問のいくつかを提出し、思うさま
苦言を書きつらね、一般的でなく、観劇記と

してのそれには、ほど遠いものになってしまった様で心配ですが、これも演集に対する我々の期待の大きさの故からなる仕業であることとを了解していただきたいと思います。

でくのぼうの会第五回本公演 「キユーボラのある街」

名古屋演劇集団 下郷勝美

十二月四日南図書館ホールで公演された「でくのぼう」の舞台公演を観た。若い劇団員の熱演によって、私達の身近かな生活にある問題を、若者達の行動、貧しい家庭生活、日本の下層生活の状況と在日朝鮮の人たちと北朝鮮の人民生活に対する政治的配慮など、テーマは豊富で現実的な問題を考えさせられた。作者の早船ちよさんは小説「キユーボラのある街」の「あとがき」で次の様なことを書いている。「主人公のジュンとタカユキの生活を中心にして、高校進学が就職か、進路をえらぶ問題、生活の貧しさということと、そのなかでの親子かんけいの問題、小、中学生の不良化と非行の問題、友だちとのあいだの民族のちがいと友情の問題、ハナエおばの夫の南鮮抑留と友だちの北鮮帰還の問題、父母の職業と、中小企業に働く人たちの労働と賃金の問題、企業の近代化という問題と、古い職人気質である父と、そのしごとへの誇りと失業の問題、中小企業と大工場との対照と、そこに働く人たちの意識の問題、そのほか、タカユキにとっては、母の信用と愛情の問題、ジュンにとっては、女性の目ざめと性の意識

の問題などがあります。

これらの問題は、ジュンやタカユキの問題であるばかりでなくいまの日本の少年、少女にとっても多かれ少なかれいくつかの共通する問題でもあるのです。いわば、そういう人間状況下にある日本の少年、少女たちVの問題を、この小説では、ジュンとタカユキという姉弟の生活を描くことによって、問題提起しているに過ぎません。そしてそれは、この小説を読むひとにとって、それぞれの立場や生活から、自分の切実の問題として、どう対決したらよいかと迫られる問題意識につながるものです。」

劇化された脚本はジュンの一家を中心に展開され、先のテーマを含みながらリアルな生活状況の中に進行される。友だちや仲間、組合の人々に支えられ、頑固な父親、辰五郎も「ジュンの奴も言いやがったが、全くおらあ、空威張りの一人狼だったよ。手前一人だけはどういきまいたって、世の中ア渡って行けるもんじゃねえってことが、この年になっってやっと分ったい。」働く人々の連帯感によって家庭と社会への目も変る、

ジュンも多くの問題にぶつかりながら、家庭の貧困のために進学できないことから、反抗的になっていったのが、働くことの意義を自覚して、働きながら定時制高校へ行くことを決意する。「ね、克ちゃん、あんた言ったでしょ、「働くってのは案外楽しい事だ。」ってあたね、一昨日、向うの会社へ行って考えちゃった。みんなあんなに明るい顔で働いてると思わなかった。先輩の友だちが言ってたわ、「わたしたちは働いてるんだ。働かされてるんじゃない」って。その人ね、二十七にもなって定時制へ行ってるのよ。すごくイカスの活動力があって、しかも女らしくって。」

でくのぼうの舞台は、過度に暗くならないで、家庭的ふん囲気をアンサンブルのうまさで良く出していたし、ジュンやタカユキも若い人が演じたので、若さの強みで張り切った舞台を見せてくれた。反面、セリフや演技に唐突な面があって、登場人物の形象化を深めて欲しかった。

演出は前向きに歩もうとする、若者のひたむきな感情、行動をとらえていたし、大人達の生きていくための生活に密着した現実性を生かそうとした意図は正しかった。しかし子供達のもっと真剣な悩み、矛盾の掘り下げと、大人の生活に対する切実な必然性と、大人と子供の葛藤、社会的背景を説明的であるが、そのセリフの説得性を注視して欲しかった気がする。場面転換における処理も、粗雑さが

目についたので、スタッフとの綿密な打ち合せて、会場の条件の悪さもあるであろうが、観客に見せる舞台芸術としての配慮や進行に注意して欲しいと思うのであるが……、キャストの気がついた寸評は、辰五郎は人の好きが出てしまつて、一徹で頑固な親父像に欠けた。トミはしっかり者のカブちゃん役を良くこなしていた。ジュンは素直な女学生を演じていたが、変革する過程が平板であつた。タカユキも行動に対する反応、態度が一本調子のような気がした。ハナエは若い人がやっていたのだが、その役の特徴を生かし

た演技であつた。サンキチは真面目な演技をしていたが、少年らしい元気が足りなかつたのではないかしら。克己は胸を張つたたくましい労働者像と若い情熱さが弱かつた。野田先生はインテリ気味。生徒に人気のある教師としての気づぶの良さが欲しかつた。多くのぼりの公演は細かい点は注文したいこともあつたが、上演意図の精いへばい生きてる人々の明るさと連帯をうたいあげた、気持の良い公演であつた。

《傷だらけの天使》

観劇メモ

労働文化活動研究会

矢部秀一

- (1) 予想していたのとはちがつた舞台装置・コーラス・ETCで、「河」などと比較して意外の感がありました。劇の展開につれてよく納得できました。映画を思わせるはじまりのところは、すこし観客に気をつかいすぎてるような感じがしなくてもありませんでしたが、それで楽に入つていけたという人もいましたからよかつたのでしよう。
- (2) 作劇法というのでしようか。コーラスを

つかつたり、シユブレヒコールをやつたり、スライドやあいう装置を用いる方法をとつたことは、あれだけの内容をもりこむ以上、どうしても必要だつたのだとわかりました。いわゆる「リアリズム演劇」というものが写真のような写真主義なのではないかと恐れもし、想像していたので、「よかつた」つまりそんな狭いものでなくてよかつた、そしてそれが成功してよかつた、と思ひました。

説明の必要を内容である以上、そしてその内容を訴えようとする以上、あえてなければならなかつたでしよう。戦時中の説明などをふくめて、説明は手ぎわよくやられたと思ひ

ます。

(3) 説明せねばならぬ内容、つまり「告発」された内容は、実は非常に大きく重大なものでした。かつ新鮮度においても第一級のものでありうるでしよう。

その告発内容の一つ、細菌戦については、「スパイもの」に登場するていどしか知られていませんが、戦争軍事研究家の間で、原水爆戦略に今や古くなつた（使用不可能説が大きい）、特殊バクテリアこそ次の戦略だといわれていることは、もつと知られていませう。・昨年の諸井条次氏の「冬の旅」もそうでしたが、こんどの方がずっと訴える力は大きかつたと思ひます。

告発の一つは「日赤」ですが、これもやはり知られていなかったでしよう。戦争責任にからんで重大です。一大発見でした。

第三に、主人公梶浦キヲを救う問題、市橋に代表される今日の組織の問題があります。第四に「ファシスト」と呼ばれる軍医油谷の科学者としての、研究者としての問題があります。第三の問題は、幕切れの一寸まえ市橋のモノローグがあり、そこで提出された疑問の大きさのわりには幕切れのシユブレヒコールが十分それをすくっていませんかつたように思ひました。

(4) 結局三人の主人公のうち、中心の梶浦キヲがあれだけ描かれたいのだと思ひますが、その梶浦の古い部分につながる油谷医師新しい部分につながる市橋看護婦の二人のも

つ問題が、実はそう小さくないんだが……
と思わせてしまう結果になります。梶浦は、
戦中派の一人として実によくできていて、よ
くやったと思いましたが、同時に油谷にだま
されつづけてきたという設定が、一寸ひっか
かりました。むろん、そんなものを無視して
もいだけの力を梶浦はもっていたのですが、
……

油谷の問題というのは、彼は細菌戦をやる
つもりが悪玉でもあります(ここでは)、
実は細菌戦にも使用されることは知りつつも、
伝染病予防にも役立つとして研究している学
者にしかかった(原子物理学者たちと同様に
)その方が、梶浦キクももつと生きてきた
かと思うのです。

自然科学者は、いや人文科学者でも大かれ
少なかれ軍事戦略に役立つ研究をしています。
また、バクテリア研究もアメリカよりソ連の
方が進んでいるという説もあります。しかし
ソ連が細菌戦の準備をしているなどといわれ
たことはありません。そこから問題はハッキ
リすると思いますが、医師として知らずに利
用されることはあるわけで、油谷を一寸そう
いう見方からみられぬこともないのです。と
いうのは、戦中もそれほどいい将校でなく
みえますから。フアシストにはみえにくいの
です。

市橋の問題は、安保のころが一寸よわかつ
たのだから、最後にぐんぐん出てきて一寸とま
どったようです。「敵にかつこと」のシユブ

レビコールがでてくるまえに、梶浦キクの死
をゆっくり、いやもう一寸しっかり、かみし
めたいと思うときに、ドンドンすすむので、
いささかシユブレビコールがスローガンだお
れになりかねないのです。

(5) 舞台転換その他、進行は実にスムーズで
した。とくに第一幕の方は実にうまく行つた
と思います。コーラスもうまかった。これは
本当によく出来たなアと思いました。稽古の
たまものなのでしょう。それらが舞台の進行
を——結果として内容の訴える力を、非常に
つよくしたと思います。

進行や舞台でいえば、油谷の友人で梶浦の
第二の恋人になる男(工)のことが不確かだ
した。そのあたりの転換も、第一幕とちがっ
てガタガタしたようですし、内容も伝わりに
くかったと思います。

(6) 最後に、比較していかどうかわかりま
せんが、「冬の旅」よりはるかにいい芝居だ
ったと思います。劇の感動の質が明日へ開
かれた道を指しているからですが、それは最
後のシユブレビコールの力だけではありませ
ん。シユブレビコールだけではないところに、
この劇の質の高さがあるのでしょう。

正直いって、脚本ではどうなるかわらない
ところが多かったのですが、実に立派な舞台
だったのに、おどろいたり喜んでいいです。照
明やスライドの点がもう一歩できれば、おし
もおされもせぬ、第一流の舞台といえたと思
います。

↓三七頁より続く

機関誌を使用しての学習会、読書会など
による活動や、日常活動としてのブロック
活動の重要性和緊急性がだされ、これら諸
活動が各劇団の東リ演オルグとしての、東
リ演係の任務として明確にされました。

(5) 最後に事務局からの提案を中心に、東リ
演への集中の問題が出され、討議の結果次の
事項がきまりました。

1. 各劇団東リ演担当者の確認。
2. 事務局への月間活動報告提出。毎月五日
切。

3. 年間観客動員トータルの報告。

4. 各劇団団員名簿の作成。

(6) 初めての試みとしての担当者会議は、一
日間の討議ではあったが、友情と連帯を深め
、事務局と各劇団の結節点であり、全国組織
としての東リ演の核である東リ演係が固く団
結し、一致して東リ演思想を普及し、リアリ
ズム演劇創造と普及の先頭に立つことが、直
に通じあい確認しえたと思います。

最後の一口感想で、定期開催の要求がでま
したが、できるだけ機会をも と共に教育
研究集会の性格をもちこみたいと思います。

文責・井岡栄一

仲間の活動予定から

—つくし

の会—

(イ) 三月二〇日・静岡県委託移動公演・場所
富士開拓村人穴部落。

上演作品・木下順二作「夕鶴」「和尚さん
と小僧さん」寸劇「兵隊」

米委託移動公演の場合、うちではテレビな
ど殆どない辺地の村々で、会場は四〇—一

〇〇人位の集会場を対照に、委託の場合、
入場無料がたてまえであり、経費は運送代
位なので赤字を覚悟の上で。

米寸劇「兵隊」は軍国主義と自衛隊を諷刺
した作品です。

(ロ) 四月三〇日・富士宮市勤労協と組んで、
メーデー前夜祭に「天満のとりやん脚色并
上僕で「神田のとりやん」を上演予定、

米富士宮地区では今迄に前夜祭は一度も行
われていませんが、今年は地域の文化連盟
(つくし加盟)九団体が統一して勤労協に

呼びかけ、積極的にとりくんで成功させよ
うと劇団が中心になって動きかけています、

(ハ) 五月二二日・前九三〇後一〇〇二回、二
八日・夜六三〇一回、二九日・前九三〇後一

〇〇二回、かたおかしろう作「牛鬼、
退治」を、日旺子供劇場として上演。二八日
(土)は一般に。

以上の他に、後援会員の地区(ブロック)
ごとにある家庭を利用して童話・人形劇・寸
劇等をもって小上演の予定。これは主に後援

会員の拡大と、会員との連帯をつよめるため
によいと思い、実験的にやってみようと今年
きめたことです。

—でくの

ぼうの会—

(ニ) 「キューボラのある街」・再演
とき／三月一二日・前一〇時

ところ／南図書館ホール
昨年一二月、第五回公演としてとりあげた

「キューボラ……」が好評で、地元の中学校
から三年生を送る会にやってほしいと要望あり
上演するもの。前より一層、深みのある舞台
をつくらうとはりきっている。

(ロ) 第六回公演「夕鶴」「おばあさんと酒と
役人と」
とき／五月七日(土)八日(日)

ところ／南図書館ホール

日本の古典的な劇を、じっくりとした稽古
を積み重ねて上演しようと現在進行中。普及
活動も、第五回に引続き、一五〇〇人以上を
目標に活動を展開している。

—仙台

小劇場—

△二月V

一九・二〇日 東リ演劇作部会・東リ演担当
者会議(静岡)

「陸橋」現地調査
「陸橋」けい古

△三月V

中旬まで
「陸橋」けい古

中旬
「芽ぶき」(改訂稿)再演け
い古

△四月V

二・三日 山形勤労者演劇祭へ参加
「芽ぶき」

下旬 メーデー前夜祭

五月以降は七月公演をめざして「陸橋」け
い古に全力をあげます、

—名古屋

演劇集団—

キューボラのある町 三井六場

ラインの監視 三幕

——京 浜
協同劇団 ——

☆ 原作・早 稲 ちよ

脚色・蘆 葉 泰 三

演出・若 尾 正 也

時 四月五日(火) P 六時一五分
所 愛知県文化講堂

☆ 名古屋演劇同好会七月例会

作 大 垣 肇

演出 若 尾 正 也

五十年目の太陽

時 七月二一日(木) 二二日(金)
二三日(土) 二四日(日)

所 県文化講堂・市公会堂

昨年12月に上演した第五回演劇教室「キューボラのある町」(中学生を対象)は、四年前前に関西芸術座が一般を対象として上演した作品なので、中学生に充分理解できるかと云う心配もありましたが、問題が、貧しい生活と高校進学の問題、青少年の非行化と反情の問題等と、自分達の生活と密着した内容をもった作品なので、今迄上演した作品(馬蘭花物語、こじきと王子・牛鬼退治)より強い共感を持って受とめられる事が出来ました。本年の二月に一般公演をやり続いて十月頃まで名古屋市中心として学校の講堂や会館で演劇教室を開催してゆきます。

五十年間無実を叫びひびく、無実を勝ちとった吉田石松を劇化したもので、出演者が延二〇名を越えたと云う大きな作品です。劇団が中心になり、名古屋演劇協議会に加盟する八劇団の合同公演と取り組み、四月より稽古に入ります。

二月二八日(日) 午前・午後
中小企業センターホール

☆ 中部ブロックの活動について

☆ 四月本公演
作 リリアン・ヘルマン
翻訳 村 山 知 義
演出 浦 はじめ

昨年二月に開催して成果をあげた第一回中部ブロックゼミナールに続いて第二回を五月頃開催する予定で、はぐるま・でくのぼろ新風と準備に入っています。それと平行して東リ演加盟劇団中部ブロックゼミも計画されています。

(1) 第一三回公演・黒沢参吉作「真土村一揆」三幕一四景のけい古に、二月二五日作者の本読みによって入る。演出は郡山勝利。登場人物七〇余名のため、東リ演・東働演をはじめ仲間劇団・サークルの協力をあおいでいる。上演は六月一六・一九日・川崎を皮切りに、東京・横浜・平塚で実施。

(2) 今年は小公演団を編成せず、行動隊が小上演活動をすすめる方針で、前期の活動対象には川崎演劇協会発表会・東働演一巻劇の夕・メーデー前夜祭はじめ諸集演出、および新作スライド使用による「真土村一揆」の普及活動がある。ンパトリイには、八三家福「八貞婦表彰」新作一幕ものがあげられている。

(3) 劇団二期生は現在一七名。二月一八日入団、二四日開講。八月六日卒業の予定で研究コースにはいった。担当・野口行男、山口修司ほか。

(4) 劇団東リ演班は、原料清をチーフに、岡田千寿、西川信。

——横浜アマチュア
演劇協議会第二回公演——

横浜市内の劇団、かに座、創芸、葡萄座、

麦の会、東芝鶴見、横浜市役、よこはま青年座で結成されている同協議会は、合同公演の二回目として一暮創作劇集を左記のように上演する。

とき・三月一二日夕六時

ところ・神奈川県立青少年センターホール

(1) 小鹿利四郎作／松本栄演出

△鑑▽

(2) 梨地四郎作／岩井志津子演出

△泡▽

(3) 高津一郎作／広中雄雄演出

△ろくでなし▽

山形演劇サ協

第三回演劇祭

山形勤労者演劇サークル協議会主催の三日目の演劇祭は、四月二日(三)日、山形市中央集会所ホールでひらかれる。

出演サークルと演目は次の通りだが、演劇協では加盟一二集団がこぞって参加するようねばりつよく運動をすすめている。

- (1) 演研こまくさ・創作・雪あかり
- (2) 神町ランブ演研・創作・台風
- (3) 橋岡グループ土・創作・あるエピソード
- (4) 寒河江演劇連盟・創作・冬の季節
- (5) 劇団北・木下順二・彦市はなし
- (6) 劇団山形・北杉介・ぼろの歌
- (7) 劇団歯車・木谷茂生・火山島
- (8) 橋山青年団・野尻民治・こいこく

(9) 滝山青年演研・伊賀山昌三・結婚の申込
40 仙台小劇場(友情出演) 瀬川竜夫・芽ぶき

舞芸

小劇場

活動計画の上半期、一〜五月は地域、職場の集会に向けて、カンパニア公演、小公演を行ない、下半期は六月初旬から一〇月の第五回公演「火だね」(仮題・板橋区の喜多パン労働者の斗いを描いた作品)の稽古に入る。

カンパニア公演のレパートリーは、(1)コーラス(値上げパンパ節他)(2)踊り(秋田音頭、沖繩舞踊)(3)朗読(4)漫才(落語(いずれも創作))(5)小型式作品「お江戸の八つあん」(天満のトラヤン改作)で三月下旬、公演開始。小公演は近くレパートリーが決まり、一幕ものとカンパニア公演の一部を併せ、四〜五月上旬上演予定。これは、劇団と交流のふかい職場を中心に、百〜二百名規模の動員で数多く上演したい。

職場の人たちとの結びつきをつよめ、カンパニア、小公演のオルグのために、豊島、波橋、練馬、北の四地区へ、組織部中心に全劇団員が入り、既に六ヶ所の公演予定が出された。又、この交流とあわせ職場の組合活動、文化活動の状態をきき、機関誌紙の提供をうけ、調査活動をするため、労働者を中心に演劇活動希望者の小劇場への参加を訴えている。

日の浅い研究生諸君も、積極的にこの活動にとりくみ、恒常的に行うことが決められた。劇団機関紙「舞芸小劇場」を組織部中心に三、六、九、一二月の季刊で一千部発行。本公演台本「火だね」(仮題)の第一稿検討会が二月下旬行われ、劇団文芸部の渡辺波江(作者)が作品を朗読、提出された意見をもとに三月中旬に改稿、再検討の上四月下旬、最終稿完成の予定。

中部ブロック

ゼミ

昨年東リ演ではじめてのブロック単位のゼミナールを実施した中部地区では、ことしも名古屋演集、岐阜はぐるまが中心になって、六月四日(五)の両日開催されます。

又、東リ演第四回総会へむけての加盟劇団のゼミは八月六日(六)土日を予定。

今年第六回をむかえる、東リ演合同演劇ゼミナールは、例年のように静岡演劇音楽センター(劇団静芸稽古場)で、八月二〇日(二)日に開催と決定しましたがそれぞれに各ブロックは中部にまなで交流学習の機会をつくり、地区ごとに煮つめた問題を中心にすえ、みのり多いゼミナールをもちとりたいとおもいます。

西北 東南

Z 東リ演について、ぼくらにも外部にも、これが地方劇団の連帯組織だという考え方が、だんだん固まってきたね。

A 創刊号のこばやし論文など、はるまじと地方都市・岐阜のつよい結びつきが感じられて、地方劇団というおさえ方の積極性がよくわかるな。

Z ただ、中央に対置する地方ということだと、東京の三劇団をどうおさえるか一例の三沢論文みたいな疑問もでてくるし、文化評論の草案の方も、こと東リ演について云えば、単に雑だというより、この先のパースペクティヴが欠けているようだ。

A その点では、テアトロで山下論文が共産党は演劇政策を確立するための提言を歓迎すると答えているだろう。

Z ひっかかるようだが、提言を歓迎する前に問題をふかめる必要がありはしないのか。労働者階級と人民の立場にたつ組織論、創造方法を実践活動の中からあみ出す、という極めて正しい方針が、たとえば東京の専門劇団とも積極的に交流していかなければならぬ、といった具体性をもった途端にどういうことか、だよ。

A アイマイって？

Z いまのところ消極的な交流さえないし訳だが、そいつをなぜ、又どういう立場、歓迎で積極化するのか、ぼくらに考えられるのは今云った労働者階級と人民の、つまり歴史をつくっていく観客の、立場、観点ということだし、そのぼくらには、東京の専門劇団は一体どこを向いて芝居してるのか、観客の顔が見えるのか、みえない不満と疑問がある。そこをアイマイにして、積極的な交流なんかおこせっこないだろう。

A しかし、現状の中で一定の物さしをあてて、弱いところは否定してしまいうようなやり方したら、その舞台を支持している観客もふくめて専門劇団を、ぼくらの敵対物にしてしまうだけだ。

Z だから専門劇団はソツとしとけ、東リ演はせいぜい自分の地方でガンバレ、それが統一戦線てわけか。

A えらくひねくれちゃったね。

Z 東リ演を地方に存在する劇団の連帯組織と考えるだけじゃまちがう。まさに実践活動の中から、新しい演劇を生み出す運動体の苦だし、そういうものが誕生するのは、現状肯定のぬるま湯の中からじゃないってことは、日本にしろ世界にしろ、演劇運動の歴史がおしえてると思うんだ。

A 実践活動をとおして大いにケンカしろ、それが、積極的交流になるってわけか。

Z 観客のがわには、専門も非専門もないだろう。いい舞台とよくない舞台があるだけだ。ぼくらは昼間働いてますみたいなこと、云いわけだったら恥にしかならない。

A その通りだ。そこで、東リ演の結集も単に政治信条の上での一般進歩性を標榜してということだけでなく、自己の観客に責任をおって、いわば合作していく演劇を、創造の運動にするための方法論・舞台創造と普及の正しい実践でそれを実証していく明らかにしていくことが、目的がおかれてるんだから。

Z 観客との結合こそその要求にこたえることが、創造の基礎というおさえ方に異論はないが、その要求の中味をどういう深さでよみとるか、従ってぼくらの舞台が、どの位なかまの要求の深い部分につきささって結節できるか、が大事ななんだ。

A 演劇リアリズムといった場合、つかみ方の一般性について、茨木憲氏が赤旗にかいていたね。「リアリズム・・・といってしまうことで、ことがらの核心に届かなくなることを恐れ」というように。

Z 観客に責任をおりーという内容が、皮相的な要求にこたえることと誤解されている傾向は、ぼくらの体質の中にたしかにあるんだよ。観客の要求なんて、一寸も高くなくて堂々と云った人もいるが、その裏返しの観客尊重なら無い方がいいな。

A どうも極端すぎるよ。直線コースもあれば廻り道もある・・なんて云うとアイマイだと叱られるかな。

西北 東南

東り演担当者会議報告

大きくは第三回総会の決定にしたがって、具体的には第一回運営委員会（一・九於川崎）によって、各劇団東り演担当者の会議は第三回創作部会と並行して、二月二〇日（日）静岡・演劇音楽センターで開催されました。

開催意図は、本年の運動方針、組織問題の項でのべられている「東り演を真に強化するため、加盟劇団の東り演に対する関心を深める」ことについて、「なんとかして東り演の結果が劇団の一人一人にまで及ぼす」ために総会によって新に設置された事務局と、各劇団の東り演担当者が有機的に結びつき、組織の核となって、東り演をどう創造的に前進させ、強化拡大するか／＼のつもりでした。

それは東り演が組織として生きていくために総会決定を具体的に実践する。共通の組織方針を生み出す組織部会的性格をもつものでした。しかし、運営委員会では第一回のことでもあるし、今まで実質的に東り演を支えてきた担当者からみた各劇団の状況と、やはり各加盟劇団の東り演への集中は具体的に、東り演係―事務局という形に比較的依りながら行われることから、民主的集中の強化というところ、そして各担当者の東り演への要求、意見、担当者の困難、問題点などを出し合い、それらの討論の中で友好と連帯を深め、

血肉のかよい合った関係を生みだすことに力点を置いたのです。

前おきが長くなりましたが、大部分は事務局の怠慢から生まれた準備不足で、実際問題としては「集まったところで……みたいなものになり、これが何らかの形で会議に反映してしまっただけではないかと思ひます。

(1) 参加は一五劇団中二〇劇団。群馬中芸、京浜協同、つくしの会、舞芸小、はぐるま、からっかぜ、仙台小、でくのぼりから各一名、静芸二名、事務局から恩田と井岡、書記が二名（静芸）計一五名（男九女六）でした。

まず、事務局から（恩田・座長）事務局報告として、東り演発足以来の歴史、現状、役割が出されたあと、東り演問題を中心に各劇団の現状報告ではじまりました。

(2) やはり、多くの劇団に東り演について、「東り演のことは○だ」とか「えらい人の集まりだ」みたいな雰囲気や一般に支配的のようです。東り演で「えらい」のは体だけでなく、この点東り演係としては担当者である以上、悩み、問題として纏を切ったように云いださざるを得ない、云いたい欲求をもつています。

一般劇団員の立場から見ると、東り演のことは「風のうわさで耳から入ってくる程度」

（舞芸小）でしかなかったり、東り演と云っただけで「とっつきにくい感じにおそれ」（つくしの会）たり又、言葉の上だけで「東り演ずれ」（仙台小）していったりの状態がある。この中では機関誌「東り演」が発刊されても「いいことが書いてあるが自分の体にピンとこない」（はぐるま）人がいたり、「東り演の活動と劇団活動とが別に思われ」（演集）たりする状況があるのです。

つまり、劇団員の「東り演に対する認識が浅い」（舞芸小）、「東り演の問題が劇団員の中にうまく伝わっていない」（はぐるま）現状から、どう拡げたいのか苦慮しているのです。

東り演係の仕事は、個人的作業の性格を現状としてもっている。しかし、それが団内に東り演を拡げ、劇団と他劇団を結び、東り演の支えにならなければならない。仙台小も云うように「東り演の重要性は理論的にはよくわかるのだが、日常の具体的活動が系統的になかなか伴わない」悩みをもっています。

劇団として、東り演係を組織的に保障しているところを決して多いとはいえません。

(3) この中でも各劇団及び東り演係は、創意をもって、地方的特徴を生かしながら前進的活動を行っています。

仙台小 東り演についてアンケートをつくり団員がどの程度認識しているか調査した。つくし 機関誌「東り演」を読む会を開催。

演集 小組班組織を確立しつつその中で東
リ演問題を討議している。

京浜 まず東リ演係の仕事として積極的
に他劇団の先進をとらえ、団内にもちこむ
ようにしている。

でくのぼろ 東リ演に加盟するにあたり三
回総会に出席し、討議資料を全員が読み
果、東リ演が身近になり自分たちのもの
として加盟できた。この力は劇団五ヶ年
計画を急速に発展させた。

舞芸小 東リ演の地域拠点劇団としての立
場が、「黙秘」創造と普及の中で、職場
地域と結びつけた。

京浜 東リ演として地域文化団体サークルに
責任をもち、地方文化を育てていく。
でくのぼろ 座内機として東リ演ニュースを
出していききたい。

演集 機関誌「東リ演」が労演で一五部位読
まれている。

三年あまりの期間に、東リ演係は劇団に定
着し、各劇団と地方の独自性を生かしなが
ら創造普及を行ってきたといえるでしょう。

(4) 午後になって、会議は提出された問題の
個々について討議をふかめた。

① 群馬中芸から、劇団内に東リ演の中で唯
一の職業劇団であるところから、諸々の点
で問題点をつき合せてもどうか？ 東リ演
は職業劇団を必要としているかどうか？
等々の点で疑問があると提出された。もち

ろん、この点は東リ演結成のことは、基本
方針に明記されているが、問題はその疑問
が団内に存在することであり、運動上の問
題であると考えます。

② 主に群馬中芸、演集などから「東リ演が
活発になれば、各劇団が活発になるか、又
その反対か」の疑問が団内にある。「劇団
が発展していけば東リ演が大きくなる」(舞
芸小)の意見。「各化人が東リ演に対し
て何かやろうとするとき、中芸の活動を発
展させる」この域から出ない団内(群馬
中芸)の現状が提起されました。

東リ演と加盟劇団のその活動は相互に反
映し影響し作業しあう。したがって劇団
の発展が東リ演の発展につながり又その逆
も云えるわけだが、頭の中でなく民族的民
主的演劇の創造と普及の実践の立場からみ
れば、その一方に偏することは正しくない訳
です。こういう考えはどちらかの活動を実
践的には解消してしまおう。このこ
とのみによる問題ではないと思うが「毎日
の活動と東リ演がまったく無関係」であっ
たり「東リ演の活動と劇団活動が別もの」
と考えられたりする現状が生まれてくるの
ではないでしょうか。時期として相対的に
はどちらかに重点のおかれることはあろう
が、やはり同時に進めていくことが基
調だろうと思います。問題の提起は、こう
した認識がありながら、現実には団内にそ
れらの考え方、やり方が存在し、なかなか

正しい姿勢に団全体がなれない、という東
リ演係の悩みなのです。

③ 東リ演係としての任務の明確化や位置
づけなどが、担当者自身の問題として、すべ
ての劇団から提出されました。

群馬 東リ演係として東リ演を団内に広げ
るだけの力がそなわらない。
でくのぼろ 東リ演を理解し、とらまえる
手がかりになるようなものを発行できに
いか。

群馬 東リ演係は劇団内の東リ演のオルガ
ナイザーだ。

舞芸小 係がまず東リ演の重要性を考え
系統的に東リ演を学び、必要性だけでな
く自分の思想としていきたい。

等々であるが、その中で機関誌の発行と、
ブロック活動の役割とが、東リ演係の任務
として浮びあがってきました。

仙台小 劇団で東リ演を普及することにつ
いて他劇団と交流会等を持ち、自分のも
のとしていく上でブロック・ゼミの役割
は大きい。

からつかぜ 機関誌の発行は、論文等を中
心に学習会を持ち、東リ演が創造を軸に
運動していく点で大きい力となった。

演集 ブロック会議を定期開催し、中部ブ
ロックの劇団の現状把握を行い参加をよ
びかける。この仕事の中核こそ東リ演係
だ。

(三二頁へ続く)

寸劇 ばか退治

劇団演集 丸子 礼二

とき・ところ……上演する時・所によって内容を変えて下さい。

登場人物

医者 助手 病人
A 人 手 者
B 力
C 人
D 人
E 人

音楽と共に医者登場

此のあたりにすまいする医者でござる。そもそも医者の仕事とは、人民大衆を苦しめる病のもとを退治すること

でござるが、近頃の世の中の有様は何とも腹の立つことばかりでござる。

ではそろそろ診察をはじめることにしたそう。やいやい助手はおるか。

へーい。(出て来る)手前は医者の助手でござる。先

生様を手伝うて沢山の病人を直しましたが、皆様の中にはいろいろと変わった病いがございますな。

自分の国でもない所へ勝手に軍隊を送り込んで、自由の為とか云って人殺しをやる心臓病。昔吸ったうまい汁が忘れられずにアメリカさんのおこぼれにありつこうと、原潜寄港でござれ、日韓会談でござれ何でもハイハイと云うことをきく肺病。いつまでたっても精神年齢十二才で紀元節などといううと有難た涙をこぼし、ピストルでも、銃でも鉄砲と名がつけば何かとぶっ放したくなる分裂症。政府が何億とつきこんでも、片っ端から下っつちまう株中毒の慢性下痢やら、ぐんぐんもり上る民主勢力はえらい人達の頭痛の種。……

医者 おいおい。早く仕度にかゝらんかい。

助手 おっ、そういう間にもう病人らしいのがやって来た。

いやんなっちゃう。

医者 これ、相手は病人、丁寧に迎えなさい。

助手 はい。……いらっしゃいませ。毎度ありがとうございます。

います。

医者 どうだろう、この態度!!

病人 あゝ苦しや苦しや、死にそうじゃ、早く、早く直して下さいませ。

助手 まあ、待ちなされ、まず手続きが大切じゃ。お前様の名

はなんと云う。

病人 はい。名古屋南兵衛と申します。あゝ苦しや苦しや。

医者 さあ、さあ名古屋の南兵衛さんとやら早くこちらに。……

……しっかりと診べて進ぜよう。……何と、これは大きな腹じゃ。

病人 はい、物価がひどく上ったのに、賃金は少しも上りませぬ。食うや食わずでありますのに……。

助手 へえ、何が入っているんだらう(ボンボンと叩いて)や、

や・や・……

医者 何とした。

助手 腹の中で何やら動いております。

病人 苦しや、苦しや、助けて下され。

医者 どれどれ（助手が差出す大きな聴診器を病人の腹にあて

る）ふーむ、ほほう……いや、これは一大事じや、この腹の中にはバカがはいっぱい果喰うておる。フーム。

助手 バカですと。

医者 さよう。恐ろしいバカの虫がはいっぱいに果喰うて、五臓

六臓を食い荒しておる。一刻も早く腹を切り開いて退治をしてしまわねば名古屋の南兵衛さんの苦しみは増すばかり、この様な危険なものを放っておいては夕張炭坑の爆発のように命をおとすかも知れませぬ。

病人 ではどうしても手術をせねばなりませぬか。飲み薬では

直りませぬか。

医者 これはなかなかの難病、勇気を出して斗かわねば治りませぬわい。

助手 あのう、アンブルなんかどうでしょうね。

病人 ブルル……とんでもない。えい手前も腹をきめまし

た。さあ、思い切ってやって下され。

助手 そうじゃ、ガンバロウ。

医者 さ、仕度じや仕度じや。

音楽と共に助手は椅子に掛けた病人に布をかけ、大きなメスを医者に渡す。医者、身振りよろしくあつて……。

医者 えーいっ！

助手、腹の中をのぞき込んで。

助手 やあ、いるわいるわ。太いのやら細いのやら、沢山ウヨ

ウヨしているわ。先生様早くつまみ出して下され……。

と大きなヤットコを渡す。

医者 よーいしよっと。

腹の中（布の切れめ）からバカAがとび出して来る。

バカA どいたどいた四十米高速道路のお通りだ。工業地帯の

建設だ！大名古屋将来計画だ！えい邪魔だな、この汚なら

しいゴミゴミしたちっぽけな家のかたまりは！どいてくれ！

立ち退いてくれ！何、どこへ引越したらいい？ええ、そ

んな事は自分で考えろ。市の発展に協力するのはお前ら市

民の義務じゃないか！補償？えーとそれは、（書類を読

み上げる）土地の十五・五％はタダで取り上げ、家屋の移転

は平均八十万円、その代り何もかもこれでまかなうんだ。余

分には十円も出さん。何、間借りしてる？バカを云え、そ

んなものまで補償出来るか！

助手 いばっているなあ、先生様、あれは何というバカで？

医者 区画整理、土地取上げの小役人バカじゃ。

バカA、舞台の一方へ行きもみ手をしてベコベコ頭を下げる。

A

はい、はい。お宅の工場が昭和四十二年に完成。え、え、それ迄にはあの辺の邪魔な町を整理してずーとはききよめて、立派な道路を作ってごらんにいれます。はあ、まにあいますとも、住民の抵抗？ヘッヘッへあんな者、警察でも使つて、実力で追へ払っちゃいますよ。ヘッヘッヘッ……。

あゝ苦しい苦しい。早くその馬鹿を退治して下さい！

医者 よろしい、家伝の妙薬。それ、バラバラバラ……

(薬をふりかける)

病人 ヒヤーツ……(キリキリ舞いして消える)

助手 やあ、苦しや苦しや……

医者 先生様、まだいっぱいバカがおります。

……(バカBをひっぱり出す)

バカB えへん、経済の事は私に任せ下さい私はウンを申し

ません。ヘッヘッへ、私の仲間のある大臣もこんな事云いま

したね。此の頃私の仲間は大活躍でして、水道、バス代、米

風呂代、何から何までね。そら上れ上れ天まで上れ！何そ

んなに上っちゃ困る？ヘッヘッへ御冗談でしょう。私はね

物価が上れば上る程もうかるんですよ。そんなはずはない？

ワカってないね、実は私の会社はね、政府から何十億借金し

てるんですよ。それでボンボン設備投資をやってヘッヘッハ

ッ、物価が倍になりゃ、お金の値打は半分になる。労働者に

払う賃金だって私の借金だって半分になっちゃう。素晴らしい

ですな。ワカったでしょう。何ワカらん？、人民は経済に弱

いからねえ……そら上れ上れ、天まで上れ……

助手 こ、これは物価バカで。

医者 さよう、これ以上あげられては大変じゃ。そら妙薬をバ

ラバラ……

医者 キューツ！助けてくれえ……(逃げこむ)

助手 ところでお前あのバカの云った事は判ったか？

医者 えーと物価が倍になれば賃金も倍になるってんでしょ？

助手 判っていないな……

医者 そんなことより、ホラホラまだバカがおります。早う早

う。

医者 心得た！(バカCを突き出す)

バカC (作文を出して読み出す)

ボクの学校の校舎は物凄くオンボロです。廊下を走ると

教室の試験管がこぼれます。講堂へ入った時、みんなが一ベ

ンに礼をするとグラツとゆれるので、気をつけて半分づつ礼

をします。でも新しい校舎をつくるのはボク達は反対です。

何千円もキフが来るからです。ボクがいつも学校へ持ってく

お金はとても沢山なので、お母さんは今日は教材費を忘れた

ことにしときなさいと云いました。だから学校へは行かずに

あちこち遊んでいました。でも明日はテストがあるから行か

ねばなりません。

テストの点が悪いという学校へ上れないから、大人になっ

て苦労すると先生がいました。僕は頭が悪いからテストの点

が悪いので、しゃくにやられて、皆をなぐってやります。ボク

は大きいから皆、怖がるんです。此の前、道で女の人にナイ

フを見せて金を出せと云ったら、サイフごとおいて逃げて行

きました。こいつはウマイや、今度から此の手でいこう。で

もピストルがあるともっと面白いのにな。おしまい。(作文

をしまつて、ナイフを出し助手に)おい、ネエちゃん、金出

しな。

助手 キヤーツ！

医者 これっ！バラバラバラバラ

あーっ ごめんなさい。

退場

助手 先生様！先生様！

医者 ふーむ。子供の心を破壊する教育からバカの卵が生まれ

るわい……

うーむ、うーむ。

病人 それにしてもあのバカに振りかけた薬は凄いききめでござりますな？ あれは何の薬でござります。

医者 (助手から袋をとって拵げ) 家伝の妙薬。鈴木松助。じ

病人 なるほどなるほど。

医者 では皆様、市会へ人民のため、代表鈴木松助さんをおくるために、ガンパロウ

終り

(注)

◎ この作品は、昨年名古屋市長選挙の時南区から立候補した共産党鈴木松助氏の応援運動のために作り、上演したものです。

◎ 内容もその集会にあったものに書きなおして下さる。

◎ 出演者の都合によっては、馬鹿A・B・C・D・Eを一人でやった時もあります。

岐阜・劇団はぐるま 公演

“ひとりつこ”

作 家城 巳代治

寺田 信義

脚色 こばやし・ひろし

演出 松岡 直太郎

日時 四月十八・十九・二十一・二十二・二十三日 (六時半)

二四日 (一時)

会場 徹明公民館

うたごえのあるところ

荒木 栄

あなたは生きつづける

弘前演研 作 間 雄 二

うたごえのあるところ

荒木 栄

あなたは生きつづける。

強く低い「心には夜はない」のハミングを、B・G——
夕陽が——

○ がんばろう つきあげる空に
くろがねの男の こぶしがある
もえあがる女の こぶしがある
たたかいはこれから
たたかいは今から……

○ 三池 /

○ 三池 /

○ 三池 //

○ 三池を知らぬ労働者はいない。

○ 三池は血みどろの労働者の歴史だ。

○ その三池の生んだ作曲家。

○ 荒木 栄

○ あなたは、三年まえの、一九六二年十月二十六日。大牟田市の
米ノ山病院で、肝臓ガンのため、三十八才のみじかい生涯を終
えた……

○ 鉄が燃えつくすように——

○ あなたは死んでいった。

○ あなたは死の瞬間まで叫びつづけた。声をふりしぼって——
「センター合唱団ばんざい /」……と。

○ あなたのヒツギは、共産党、社会党、沖縄人民党、労働組合、
民主団体など四百人の同志と仲間の肩に運ばれ——
三池 /

○ 三池の歴史の栄光の輝きの中に――
○ 鉄が燃えつきるように
○ あなたは死んでいった。

い／＼

○ いや／＼死んではいけない／
○ あなたは、生きています。

○ 日本に、世界に、「うたごえ」のあるかぎり。あなたは「うた
ごえ」の中に、永遠にたくましく生きつづける。

○ 数百万の労働者を励まし、

○ 数千万の日本人民を力づけ

○ 数億の世界の人民をふるいたたせて――

○ 荒木 栄／

○ あなたは生きつづける。

○ 荒木 栄

○ あなたは、「うたごえ」と共に永遠だ／

「がんばろう」のハミングをB・Gにして――

○ あなたは、大正十三年、大牟田市の三池港の近くにある、三池

○ 炭鉱社宅に、九人兄弟の末子として生れた。

○ お父さんは、三池の機関車運転の労働者だった。

○ あなたは小さい頃、よくお父さんの職場へ遊びに行つて、三池
港のかたに沈む夕陽を一人じつと眺めているのが好きな子供
だったという。

○ あなたの音楽は、その頃から、きわだっていた。音楽の時間
は、先生に変わってタクトをふった。

○ 卒業式には代表として答辞を読むほど優秀であつたあなたは、
しかし高等小学校にすすみ、やがて三井三池製作所に入つて、
十五才でバイオリンをひきまわつた左ききの手にハンマーをに
ぎり、それからガンにおかされるまで、二十三年七ヶ月の間、
振りつづけたのだ。

○ あなたの労働者のハンマーは――

○ あなたの音楽のタクトであつた。

○ 雨の降る夜はつらかるね

○ ホッパ―にらんで夜明けまで

○ 無口のあんたが火を囲む

○ ビニール小屋にとどけたい

○ 腹まき 綿入れ 卯酒

○ 一九五九年、夏／

○ 三池に労働者の闘いが始まつた／

○ 荒木 栄

○ あなたは「一九五七年・うたごえ祭典」に参加し、音楽は労働
者にとって、かけがえのない武器であることを知つた。

○ そして、五九年二月、大斗争をまえに、あなたは日本共産党に
入る。

○ 一九五九年、真夏の太陽が燃える／

千二百人の指名解雇撤回をはじめとする、あなた達、三池炭鉱労働者の、合理化反対斗争は、おりから高まった安保斗争をさええ、また、安保斗争が三池斗争をつつんで、斗いは大きな炎となった。

警官隊のほか海上自衛隊までくりだしての凶暴な弾圧にも屈しなかった、あなた達。

右翼暴力団の襲撃にも、中労委のごまかしのあっせんにも負けなかった、あなた達。

荒木 栄

あなたは、ビケの隊列の中で、ホッパーの待機の中で、五線紙をひろげて、仲間たちのために、次々と歌をつくった。

「どんとこい」

「みんなでみんなで敵をうて」

「がんばろう」

「三池の主婦の子守歌」

「炭鉱杜宅のおかみさん」

三池斗争は、日本の労働者階級に不滅のかがやきを残した。しかし、千二百人の首切りを撤回させることはできなかった！

再び「心には夜はない」のハミングをB・Gにして――

夕陽が――

その敗北感にうち沈む、青年労働者を励まし、笑いをとりもどしたのは――

夕陽がよごれた工場の屋根に

しずめば、おれたちや町に散らばる

若者や娘たちの胸に 灯をともしに

心にや夜はない いつも夜明けだ

心にや夜はない いつも夜明けだ

そして、一九六一年の暮れ、

男声合唱による組曲「地底の歌」が生れる。

「有明の海の底ふかく

地底にいとむ男たち……」

と始まる、この曲は、日本の労働者階級のつくりあげた、もっともすぐれた創作曲として評価された。

そして、次の年、六二年の春――

板付基地反対十万人集会の中で――

「この勝利ひびけとどろけ」が生れる！

とびたてぬ 百のジェット機

姿をかくす 戦争の手先

板付は包囲された

アメリカは包囲された

南ベトナムへ 南朝鮮へ

この勝利 ひびけ とどろけ

荒木 栄……

だが、疲れも、絶望も知らぬ、あなたの体をいつか、むしばんでいたガン……

「赤旗」のハミングをB・Gにして——「民衆の旗——」

○ 全国からの激励文や寄せ書きの赤旗にうずまりながら、二ヶ月の危トク状態がつづいた。あなたは、かすれる声をしぼるようにして云った。

○ 「ぼくは、死というものが、不思議なくらいこわくない。しかし、いまいくら死にたくないと思ったことはない。ぼくには、やり残したことがうんとある。それをやりとげずに死ぬのが残念だ……」
そして、また。

○ 「死とむかいあってみて、労働者の天下が必ずやってくるという確信が、ますます強くなった。それがうれしい……」

○ 一九六二年十月二十六日

○ 荒木 栄

○ あなたは三十八才という、みじかい生涯を終えた。沖繩をかえせ／など、六十二曲を「うたごえ」の戦線に残して。

○ インターナショナルのハミングをB・Gにして——

○ へたて、飢えたるものよ——

○ 死ぬ二月まえにつくった「わが母のうた」。そのハ母Vとは、あなたのハ党Vのことだ。

○ 雑草の実がうれて

土深く芽生える朝に

ああ わが母こそ太陽

たたかいを育てる太陽

雑草のたくましさ

踏まれては伸び ひろがって

（インター（ハミング）B・G続いて——）

○ 荒木 栄

○ あら草のたくましさ。

○ あなたは「うたごえ」に生きて死ぬことはない——

○ 「うたごえ」に生きつづけて、永遠に我々の中に死ぬことはない

い／

○ 今、ここに、あなたはいる！！

（『カヘタ日旺版二』、二八より）

ガード下から

栗木英章

人物

父 山下鉄工所（ミナミ工業の下請）を經營
健二 その息子、ミナミ工業労働者、組合青年部副部長
和子 健二の妹、中学三年生、演劇部員
正夫 山下鉄工所労働者、中学時代健二と同級生
敏江 正夫の妹、和子の同級生
黒田 ミナミ工業外注生産係

町から村から 職場からガード下から

声高らかに叫ぶ……

時 現代、初秋。

ところ ある地方都市、私鉄電車ガードわき。

舞台はガードわきの山下家。部屋（一間）にはダンス、仏壇、飯台が置いてあり、仏壇の上に女の写真。つくりつけのタナの上に古いラジオがある。下手は玄関。上手前面の部

分が板の間になっており、いわゆる勝手場である。流し、プロパンガスが備えてある。上手奥からは山下鉄工所の裏口へ出入できるようになっている。
機械の音が一定のリズムをもってきてこえる。時々電車の通過音が大きくひびく。初秋の夕ぐれ時である。
幕があくと、和子が本を片手に右に左にと歩きながら、英語の問題集をやっている。

和子 （時々勝手場の煮物に注意しながら）

Dick and Tom were playing in the snow.

"Let us make a snow-man," said Dick,

"That will be a lot fun," said Tom.

They ran to their mother, mother

ときたね、ええっと……

父 （裏口から顔をだし）和子、一頁目は三てん……

和子 三てん七五キログラム。

父 そうすると、あれだな、一キロは三てん七五貫ってわけか。

和子 （戸惑ってあいまいに）……うん。

父 どうも何べん聞いてもわすれちゃってなあ。（顔をひっこめる）

和子 （大声で）あ、父ちゃん、ちがうちがう。

父 （再び顔をだし）何だ。

和子 一キロはね、ええっと、約二百七十匁。

父 そうか。しっかりせんか。

和子 英語で頭がいっぱいだっただもん。

父 ええ、そりゃもう。
黒田 検査もびびる。

[illegible]

黒田 三麦との関係で、規格もかましくなる。

11

ものごと合理化するなりん。

黒田 父はあ。それで、このまじり、ちとあつた。下請との関係も、当然

24

は、三菱の系列にいらつて、工場の組織も内容も大巾に變つ

黒田 急いでるんでね、用件を云お。う。君も知ってのちとち、ち

又 あ。 苦情を聞き取った訳じゃないだ。

品は検査がきびしいです。ねえ。それね、例の手の形はきだ……

父和子、座布団ぐい手入れしとけ。……黒田さん、今度の部

黒田 ああ、いよいよ緑座(る)

①で裏がえす、しかし裏も同様である(る)

又、とうもろこし、田んぼ、とうもろこし、急いで座布団をだすが穴がある。

和子。父ちゃん、鼻が悪いのよ。(勝手口へたこ)

Xi. 5425.40

和子、去る。電車の通過音。父と和子、裏から出てくる。

[illegible]

瀬田 工場、はい、さうさう。話か
和子 あ、のは工場にいますか、

田 兼 父さんと呼んで。

● 子母方

田 何 度 人 元 子 乃 乃 乃 乃

子(五七) 子(五七)

田省
か
・
・
・
・

和子 $\text{U}(5)$ (ななう. 気)

田 兼 子

•
•
•
•
9
34
7
2
5
C
2
8
T
24

田澤 子時 (父) 由 the way へ 送られし。

35、(玄關心、黒田(る)ABM道、方向、方向、。。。

watch 望, water, wav ● 波, うねる ●

やらにやなるまいか。(単語を覚えながら夕食の仕度をする)

おすよらにのきかをもち、
勝手場へく

④ (シ) 5分、
何かにしてゐる。
電車通過の音。
思ふ。

和子 敏ちやん！

(玄關まで行くが、やがて縁に座る) 深刻だ

(2) 子。

和子 だから、とにかく明日学校へ――

てゝいふ時たよりにならわ。きつ親身になつて相談のつて

和子 今日、母ちゃんの命日だから。
父 わかっとる。(裏へ去る)

和子、飯台を出して夕飯の仕度をする。
健二、入ってきて飯台の上のものをつまみ食いする。

和子 こらッ！ (ぶつまねをする)

健二 おっと！ (歌う) 松の木ばかりが松じゃない、おかずをみながら唯一人・・・

和子 シャラップ。

健二 急ぐんだ。

和子 一寸待ってよ。今すぐ豪華なものができるから。

健二 お前の作ったものにゃ、下痢止めが必要だからよ。塩コンブのお茶づけでいい。

和子 なめるな。

健二 そんなニキビでデコボコの面、なめたら舌があれちまうよ。はりたおすぞ。(勝手場から煮物の入った鍋をはこび)

和子 じゃ、できたものから・・・(ごはんをよそう) はい。今夜は三人揃って食べようと思ったのに。

健二 すまん。我ら青年・・・(もりもり食べながら) 家庭のぬくもりにおぼれず、恋人ももとめず・・・

和子 それはウソ。(お茶をつく)

健二 ・・町から村から、戦場からガード下から声高らかに叫ぶ、アメリカ帝国主義の侵略戦争許さず、日本の軍国主義粉砕：
・・・(お茶をのむ) 熱っ！

和子 子のたまわく、足もとをみよ。

健二 畜生。

和子 今夜は何。

健二 うちの戦場でな、近く首切りを強行しようとするから、それの反対集会だ。

和子 首切り？

健二 そうさ。三菱というでっかい会社の下にくっついてから、ミナミ工業はだんだん軍需品を作るようになったんだ、それで俺たちが反対すると、首切りの攻撃をかけてきやがる。

和子 軍需品で。

健二 戦争につかう道具さ。鉄砲とか戦争とか、人殺しのための。

和子 でも、どこが使うの。

健二 アメリカ。自由で平和な国と宣伝しているアメリカが、ギャングみたいにくっついて押入って爆弾おとしたり、毒ガス使ってベトナム人を殺してるんだ。

和子 そんな道具をさ、なぜ日本で・・・

健二 今の日本の政府はな、よく聞けよ。アメリカや日本の金持や大会社のためのものなんだ。戦争すりゃ、そいつらは大儲けするだろ。だから、いいなりになって人殺し兵器でも何ても作るんだ。

和子 おそろしい。

健二 だから、どうしてもくい止めなきゃ。

和子 今夜はミナミ工業だけじゃなく、いろんな工場が集まるんだ。ふうん。・・・あ、忘れてた。父ちゃん話があるって。

健二 急ぐってか。

和子 うん、さっき黒田とかいう人がきて。

健二 黒田？ あいつ。

和子 呼んでくる。(裏口より父、入ってくる) あ、兄ちゃん
が……

父 (飯台を前にどっかり座る) 酒。

和子 (コップに酒をついてもってくる) ちょうどいいからご飯に

父 (一氣に飲みほす) また出ていくんか。

健二 集会があるんだ、ぼつぼつ行かないと。

父 たまには家にいたらどうだ。

健二 そうはいかないよ。俺一人の問題じゃないもん、じゃ、行っ
てくる。

父 待て、話がある。

健二 ……

父 時間はとらん、坐れ。……お前、ミナミの組合で、えらく
派手にやってるそうだな。……云いにくいけどな、その組合
から手引かないか。

健二 そんな、ばかな……

父 おれのたのみだ。

健二 黒田におどかされたんだな。

父 なに……。 (和子に) いらんこと云うな。……なあ建二、
高い利子承知で借金して苦労重ねてやりはじめた鉄工所が、
何とか軌道にのりだしたところだ。だが苦しい。品物をつく
っても値切られるし、現金が入るのもおそいからな。今が大
事を時なんだ。この大事な時にミナミから注文でも止められ
たら、それこそ、たちどころにつぶれちまう。……そうな

りやお前、工場の七人は皆、明日から飯の食いっぱぐれだ。

健二 それと、俺が組合の活動やめることと、どういふ関係がある
んだよ。

父 うちの工場はミナミの下請だ。お前がミナミで組合をやりや
……

健二 父ちゃん、黒田がそう云ったんだろう。そんなもん、明らか
な脅迫だよ、今から集会で早速話してくる。

父 そればかりじゃない、お前がアカのまねごと続けりゃ、首を
切られるかも知れん。

父 そうなったら……。和子の進学もひかえているし……。
ストップ。私は父ちゃんや、兄貴に世話をかけないようにや
ってくわ。

和子 お前は黙ってる
父 だって……

父 なあ、ここはいちばん、おとなしくして……

健二 俺、そういう考え方一番嫌だよ。

父 なに。
健二 俺たちみんなで、軍需品製造反対、仲間から一人も首切り出
すな、ってがんばってるんじゃないか。そこから一人だけ脱
けだして、身の安泰はかってどうなるっていうんだよ。……

父 ……それに、俺の行動を口実にしているが、ミナミはどっちみ
ち下請のしめつけを強行しようとしてるんだ。なあ、父ちゃ
ん、俺が組合やめたら注文を出すなんておどかしで、云いな
りになつたら、その内手形だつて棚上げされちまうんだよ。
理屈はそうだが……。なあ、もう少し経ちや他の工場から注
文もとれるし、まるまるミナミの云いなりになることもなく

健二 なる。長くとは云わない、少しの間だけおとなしくして・
そんな不正が認められるかよ。三菱とグルになって、どん
ん兵器をつくっている。こいつをやめさせるのに今が大事な
闘いなんだ。・・・時間がないうから行くよ。会社側の卑劣な
攻撃を集会で報告しなきゃ・・・(立ちあがる)

父 馬鹿野郎！ そんなこと喋って後始末はどうするんだ。お前
らは、赤旗ふって氣勢をあげりゃすむが、下請はどうなるっ
てんだ。

健二 だから前にも話したように、ミナミの労働者と下請全体が一
緒になって斗っていくって・・・

父 理屈はどうとも云える。具体的にはどうなんだ。この間の組
合の懇談会に、忙しいめをさいて参加しやどうだ、くどくど
一般的な報告ばかりで、下請のかかえている問題なんか、て
んで聞こうともしない・・・

健二 まだあれは充足したばかりで・・・
父 ミナミの組合は、下請のことなんか考えやしない、それと同
じように、三菱の組合はミナミのことなんか眼中にないんだ。
それが現実だ、ずっと続いているなあ。

健二 そりゃ・・・
父 ちがうって云うんか。お前が、ミナミの組合の何とか部長と
かいりお前が、一度だって俺の話を真剣に聞こうとしたこと
があったかよ。

健二 ・・・
父 職安へ重い足ひきずって、係員の嫌味たっぶり聞かされて・
・ややつとこ雀の涙ほどの失業手当もらって暮らしをたてて

いたあのつらさを、もう一度俺に、味あわせようというのか。

正夫人 ってくる。

和子 正夫さん。

正夫 こんばんは。

健二 よう。

正夫 おっす。おやじさん、一寸話があるんだ。

父 まあ、そんなとこにつたつたってないで、上がれよ。

健二 おれ、行く。

父 建二。

健二 ・・・この攻撃、絶対はねのけるよ・・・父ちゃんに云われ
たこと、反省する。(去る)

正夫 (正坐して) 俺、悪いとこへ来たんじゃ・・・

父 なんだ、あらたまって。え、お前らしくないぞ。

正夫 俺、今日限りで工場やめさせてもらおうと思って。

父 やめる？

正夫 突然ですみませんが・・・

父 何か、気にさわるようなことでもあったのか。それとも・・・

正夫 いえ、とんでもない。ハンマーのふり方ひとつ知らなかった
のに、面倒みてもらって、不服だなんて・・・感謝してます。
じゃ、どうして・・・いや、俺は責めて聞いてるんじゃないぞ。

父

正夫 わかっています。俺、船にのるんです。
父 船へ？

正夫 おふくろの手術に、どうしてもままとまった金が必要なんで・
父 ・・・そうか。

正夫 今まで多少あった貯金は、高い注射代ですっとなでしまったし、それに体の衰弱には蜂蜜がいいって聞いたって、近ごろのような物価高じゃ、それも満足にできやしない。もう、どうしても入院させて手術しなきゃ。

父 わかったよ。なあに、工場のことなんか心配いらぬ。残ったもので何とかやっていけるからな。

和子 (勝手場から) でも、生意気云うようだけど、何か他にいい方法があるんじゃないの。

正夫 そんなもんがありゃ、とうにとびついてるよ。

父 だがな、お前のような未経験者に大金を払ってくれるのか。特殊な船で荷役を・・・それに紹介してくれたのか、遠い親類で、そこからも前借りしてるんです。

父 遠い親類って、自衛隊の・・・

正夫 ・・・ま、これ以上くどくきくまい。だが、お母さんには話してあるんだろな。

正夫 いえ、短い期間ですから。

父 しかしな、片親ってのは子供に離れられるとさびしいもんだ。ことに病気で寝こんだりしてるとな。話しておくことだ、何も。

正夫 はい。

父 力になれんですまんな。

正夫 いえ、そんなこと。

正夫 いろいろお世話になった上、やめるなんて切りだしにくくて・・・どうも、こんな突然になつてすみません。

父 いや、それでいつ出発だ。

正夫 今夜の九時、佐世保へ。

父 佐世保。九州の先っぽじゃないか。

正夫 じゃ。(立ちあがり玄関へ行く)

父 見送りに行けないが、元気でな。

正夫 おやじさんも。工場みんなによろしく。

父 うん。

正夫 和ちゃん、敏江の相談相手になって。

父 和子。いいわ、でも。

正夫 和子。さようなら。(去る)

和子 和子。

父 買ってきてくれ。

和子 嫌よ、今日お米買ったから、そんな余裕ないわ。第一、正夫さんの家のこと思えば・・・

間

父 思って、やり切れないから、飲むって云ってるんだ。
 和子 父ちゃん弱いわよ。何でも酒でまぎらわして。
 父 酒じゃない、焼酎だ。
 和子 どっちでも同じことよ。何さ、家の中でいばりくさって。
 父 なに、お前は誰のおかげで食わせてもらってるんだ。
 和子 それとこれとは別問題よ。子供に向かってそんなこと云うなんて、被害者意識だわ！
 父 何だ、被害者意識って。
 和子 知らないわ。とにかくシヨックよ。
 父 ちえっ、どいつもこいつも一人で大きくなったような顔して親にたてついて。(ご飯を食べはじめろ)
 和子 おつゆさめちゃった。あつためようか。
 父 いい。
 和子 (父の顔をみている)
 父 何だ。
 和子 兄貴の云ってること、やっぱり正しいと思う。
 父 なんだ、急に思い思したように。
 和子 父ちゃんと兄貴がケンカすると、つらいわ。
 父 ケンカじゃない、その何だ、意見が違ってから対立するだけだ。
 和子 父ちゃん、ずっと前から口ぐせのように云ってたじゃない。
 父 戦争に反対だ、俺たちの青春は戦争でめちゃくちゃにされたって。
 父 お茶。
 和子 だのに、兄貴が戦争に反対のデモに参加したり、兵器の生産に反対すると、怒って……

父 お茶だ！
 和子 (お茶をつぐ) 兄貴が云ったわ。反対なら反対って大声で叫ばなきゃ、少しもよくならないって。その通りだと思いの。
 父 そう簡単にいくか。生活の問題がかかってくるんだ、生活のなあ。
 和子 でも、そればかりでなくて、父ちゃんにはフアイトがないわよ。昔、大好きな母ちゃんをかっさって結婚したようなフアイトが。
 父 (あわてて) かっさらったって、いつ話した。
 和子 酔っ払うと、いつも云ってるわ。
 父 お茶。
 和子 品切れ。
 父 ……お前も、だんだんアカにかぶれてきたな。
 和子 アカって何
 父 アカってのはなあ、うん、とにかくアカはいかんだ。
 和子 戦争に反対することも、首切りに反対することも悪いこと？
 父 いや……
 和子 だったら、アカってことはいいことじゃない。
 父 子供にはわからん 早くかたずける。
 和子 うん。おいしかった？
 父 (ごろりと横になる)
 和子 おいしかった？
 父 すき、腹にまずいもんなしだ。
 和子 いやあ、せっかく苦労して作ったのに。
 父 うるさいなあ、父ちゃんは考えごとしてるんだ。うまかった

タイプ●関係で56ページは欠ページになりましたことを
厚くお詫び申し上げます。

クロカ▼印刷所

和子 はい。よ。（飯台をかたづけ勝手場へ行く）

父 父は和子が向うを向いて洗いものをしているのを確かめてから、仏壇の上の女の写真を手にとり見入る。写真に話しかけるように、何かつぶやく。

和子 何か云って？

父 いや、なんにも。

和子 （そっと父の方を見、再び洗いものを続ける） 今でも、母ちゃん好き？

父 （あわてて写真をもとに戻し） 馬鹿云え、この年になって。

父、ラジオのスイッチを入れ、腕まくらで横になる。

ラジオ「ただ今の歌謡ベストテン、提供は三菱重工業でした。日本の生みだす製品は、陸に海に空にとあらゆる分野で活躍・・・」父は、荒々しく番組を切りかえる。浪曲が流れる。

父は再び横になる。やがて和子は、コップに酒をつぎ父のところへ持ってくる。

和子 （ラジオのスイッチを切り） はい、もうこれでおしまいよ。

父 （起きあがって） うん。（ゆっくり飲む。電車の通過音）

和子 父ちゃん。私、昼間の高校へ行くのやめようと思う。

父 何を、突然・・・

和子 真剣よ。

父 馬鹿なこと云うな。

和子 今みたいな苦しい状態で、無理して行きたくないの。

父 お前は家のことなんか心配しないで、勉強だけやりゃいいんだ。

和子 今までそう思ってたわ。でも、それじゃいけないって気がする。

父 いつ決めたんだ。

和子 今日・・・突然でごめんなさい。勉強が嫌になったからじゃないのよ、家のことや敏江ちゃんのことを考えて・・・

それで、働きながら夜学へ行くわ。

父 どうもこいつも、俺の心配を無にしゃがって。

和子 父ちゃんの苦労、身にしみる程わかってるわ。

父 ませたこと云うな。・・・夜学なんて第一、体がえらいんだろ。

和子 そりゃ少しは・・・でも一生けん命やるわ。この間ね、中学校の演劇部の先輩がそろってきて、話しあいしたの。そん中

で一番しっかりしてたん、夜学へ行ってる人だった。

昼間へ行ってるのはでんでだめ、映画俳優がどうの、流行歌手がどうのって、うかれたことばかり喋ってて失望したわ。

・・・ね、ずっと前、父ちゃんと兄貴と私の三人で「キューポラのある街」って映画みたでしょ、あれに出てくるジュン

みたいな強い女性になる。

父 調子のいいことばかり云って。

和子 いいでしょう。

父 母ちゃんは、そんなにペラペラしゃべらんかった。
和子 ねえ……

——健二、いそいで入ってくる。

健二 父ちゃん。(ボンと靴を脱ぎすて部屋に上がり)……あの
よ、今集会でこの攻撃のこと報告したんだ。そうしたら、昨
日から今日にかけて、至急会社側に抗議することになったん
だ。

父 それで。

健二 それで……

父 それで何だ。

健二 明日の午後、うちの人員整理と兵器生産反対の団交やるんだ
けど、その前に昼休み、職場集会やるんだ。そんな時に、黒田
がきて脅迫した内容や、手形のことなんか、父ちゃんに話し
てほしいんだ。

父 何べん云ったらわかる。一つや二つの下請が、ガアガア騒い
でどうなるってんだ。下手じゃあ泣き寝入りじゃないか。

健二 ところがよ、一つや二つじゃないんだ。ミナミが三菱の部品
工場になってから、急にしめつけが厳しくなったろう。これ
じゃ生きてけない、一緒に斗争っていう下請が続々出てきて
るんだ。

父 そんなもん最初のうちだけだ。いざフタをあけてみりゃ、は
いさよなら、私んところは関係ありませんってことになるにきま
つとる。

健二 だめだよ、もっと下請仲間を信頼しなきゃ。どうも母ちゃん
死んでから、不信任がつよくなって。

父 お説教きいてるんじゃない。

健二 だからよ、今の集会にも下請のおやじさんや、労働者がたく
さん来ててさ、話しあったろ。明日の昼休みも必ず参加する
って云ってるんだ。今度こそ、ミナミの組合と下請との結束
固めようって皆はりきっている。それで今、デモ行進と一緒
に、手わけして下請をまわってるんだ。(ポケットから万年
筆と紙をだし)……これ。

父 何だ。

健二 明日、話すのに、メモとついたら方がしやすいだろ。

父 誰もまだ返事なんかしちゃうらん。

健二 頼むよ、山下鉄工所のおやじ。

父 なんだ、今ごろ。

健二 悪かったところは反省するよ。でも、これだけは云えると思
うんだ、下請に対するしめつけや合理化をはねのけるにゃ、
やっぱり下請自身が立ち上がらなきゃだめだってこと。

父 ……

健二 うちの組合もがんばるけれど、そいつがないと、足もと見す
かされて負けてしまう……。父ちゃんの批判も確かにそう
だけど、そういう父ちゃん自身がそばで見ているだけで、ミ
ナミの云いなりになっていては……

父 いつ、云いなりになった。

健二 だって、現に黒田がきたら……

父 あんなもんは、その、ついフラフラと弱気になっただけだ。

健二　ほんと？

敏江、かけ込んでくる。

敏江　和ちゃん。

和子　どうしたの。

敏江　兄が・・・

健二　正夫がどうした。

敏江　船に乗るって、母ちゃんが泣いて止めるのも聞かずに出て行ったの。

健二　船に・・・？

父　その話ならさっき本人に聞いた。敏江ちゃん、兄さんはすぐ帰ってくるんだろ？

敏江　ううん、それが外国へ・・・（つかんでいた紙片をさしだして）　これ。

健二　（うけとって）何だ、LSTじゃないか。

父　何だ、そりゃ。

健二　アメリカの輸送船だよ。日本からベトナムへ人殺しの兵器を運んでいるんだ。

敏江　そんな危い・・・

健二　去年も一人、南ベトナムの憲兵に射殺されてるんだ。しかも何の補償もない、めちゃくちゃな労働条件の危険な作業だ。そうか・・・

――電車の通過音。

敏江　止めて、おじさん、健二さん。兄を行かせないで！

父　九時に駅を発車だと云ってたが・・・

健二　（腕時計をみて）よし、まだ間にあり。父ちゃん、何故止めなかったんだよ。

父　そんな危険なことに知らなかったし、その、おふくろさんの手術の費用が・・・

健二　金なんか、みんなの力で何とかなる。それに、生活保護でも何でも要求していくさ。こんな仕事に、俺たちの仲間をやったまるか！

父　わかった。何をグズグズしとる、早く行くんだ！

健二　よし。

敏江　私も行く。

健二　走るぞ。

和子　（玄關へ行き）　雨だわ。（素早く部屋にかけてあるカッパをとり）　敏江ちゃん。

敏江　ありがと。

父　健二、おまえもだ、（裏口にかけてあるカッパをとり、健二に投げる）

健二　サンキュー。（敏江に）さあ！

――二人、走り去る。電車の通過音。

和子　大丈夫かしら・・・

父　・・・

和子　心配だわ、ねえ。

父 まかしときゃいい。・・・帰ってくる。

和子 のんびりしてるのね。

父 そういう訳じゃないが・・・

和子 父ちゃん、やっぱり若者を信頼してるのね。よくケンカはしても。

父 馬鹿野郎。あいつ、早合点のおっちょこちよいで・・・云いだしたらききやしない。

和子 父ちゃんとよく似てる

父 なに、俺はもっと落ちついてらあ。(健二から渡された紙と万年筆をみて) だが弱ったなあ、一体、何を話しゃいいんだ。

和子 その、あれよ、今日黒田とかいう奴が来たこととか、今まで苦しめられたこと、みんなそのまま云っちゃえばいいじゃない。

父 そうたやすく云うな。何しろ、人前でしゃべるのは、生まれて始めてだからな。

和子 大丈夫よ。ほら、この間兄貴の組合が主催した、フォークダンスの集いに参加したでしょ。みんないい人ばかり、こう、

腕がこんな太くって、親切で、うん、それでいてさっぱりしてる。(笑う) 思いきり踊ったり、でっかい声で歌ったりして本当に楽しかった。そんな時、つくづく働くってこと素晴らしいなと思っただわ。

父 うるさいな。(ぶつぶつ口の中で云いながら、メモする)

和子 (首をすくめて) ごめんなさい。(外を見あげて) やんだわ、通り雨ね。・・・兄貴たち、もう駅についたかな。

父 ・・・品物を一生けん命つくっても、現金はもらえず・・・う

ん・・・

和子 敏江ちゃんの家のこと、クラスで相談して力になってあげなきゃ。

父 ・・・今年の六月から、手形の期限は六ヶ月にのばされ、それさえも七割ちかくに値切られ・・・

和子 あら、星がでてきた。ねえ、父ちゃん、今日母ちゃんの命日よ。

父 わかっとる。

和子 母ちゃんの死んだ日、涙をこらえて一生けん命、星を見てた。

父 あれがカシオペア座、あの三角形をしたのが三角座・・・和子。すまんが、留さんや後藤さん、工場みんな呼んできてくれ。

和子 うん、山下鉄工所の勢ぞろいね。

父 まあ、みんなと話しあわなきゃな。

和子 (涙をふいて) ガード下に、おセンチは禁もつ。・・・行ってくる。

父 あ。

和子 なに。

父 うん。・・・夜学へ行ってくれるか。

和子 え。(明るく) もちろんよ。

—— ミナミ工業と地元工場の組合のデモ行進が、シユブレヒコールしつづ、近くへさしかかる。

和子 あ、デモだわ。おおい、がんばれ！がんばれ！(手を振りながら走っていく)

シユプレヒコールだんだん高くなる。父は、そつと母の
写真をみ、再びつかえつかえしてペンを走らすうちに

——幕——

「ガード下から」 について

この作品は私にとって第四作目で、昨年の夏、病氣療養中に書きあげたものです。

ずっと前から、一幕劇の中で最も印象に残っている「果ばなれ」(黒沢参吉作)のような作品を書きたい、と強く思っていました。勉強不足と時間がないことから進みませんでした。しかし、病気で時間がとれたことと、私たちの兄弟演劇サークルが、名古屋南部青年劇場の上演レバをさがしていることがきっかけとなりかかりました。

私の古い家のすぐ裏に、母の働いている鉄工場があり、その少しむこうにプレス工場があり、その間に小じんまりした長屋があり、そういう中で働く仲間の生活を描こうと、一生けん命書きました。

演劇研究会でくのぼりの会・栗木英章

米「ガード下から」を読んで

「ガード下から」は、作者の誠実さがにじみでているような作品です。

舞台は作者の住む名古屋南部の中小企業地帯と思われませんが、「ある地方都市」と指定

されているのは、安保体制下、独占企業に系列化され、軍事産業化されつゝある中小企業の危機は、まさに全国的なものであり、地方的特殊性をこえた普遍性をもつものとおさえたいからでしょうし、私の住む京浜工業地帯の生活そのものと考えてよいだろうと思います。また、中小企業といっても零細企業に近い一家庭で、父親が息子の説く斗いの道以外にはないことを知って、立ち上っていく、ということをテーマと考えてよいだろうと思います。それを支え娘は高校へ進学することをやめて、定時制で学ぶことを決心します。そして、彼らのもう一つ下積み、病気の母をかゝえた兄妹、兄は、LST船員になろうとし

妹は中学を休んでアルバイトをする、まさに生活の権利を放棄しようとしている兄妹をもその輪の中にまきこんでいくことになり、会社の手先として登場する黒田以外、登場人物は、すべて、いわゆる現代の合理性にゆがめられた人間は一人も登場せず、まともにさゝやかな人間らしい生活を望んでいる人たちだけが登場します。それは、作者が、働らく人々が、本質的に誠実なものであるとおさええた結果であろうと思います。それは、それでわかるし、この作品の場合よいと思う

のですが、各登場人物にもう少し多様性が欲しいと思うのです。

例えば、父親は、開幕直後登場して、貫とキログラムの換算ができないという人の良さを表わしますが、小なりといえども企業を経営し、それに全生活をうちこんできた人間の生括的な知性が泥にまみれたような気がするのです。もちろん、彼の日頃の仕事に目方の問題は必要なかったのかも知れませんが、この場面が、人の良さよりも、愚直さが表わされる結果になると残念です。自分の企業を宝物のように大切にする一経営ばかりでなく、仕事そのものを大切にする職人気質とでもいえるようなもの、それを大切にすればするだけ息子のいう斗いにはいることを拒みながら、本当に自分の仕事を守るためには、それしかないといわかっていく、その執着と転換がほしいのです。

それは和子についてもいえます。彼女が高校にたくした望み、向学心といえるのでしょ

うか、それがもっと強く欲しいと思います。そして父の企業をつぎ、娘を高校へという夢、娘の全生活と勉強へという夢を、斗いと団結の輪にくみいれていく動機というか、怒りは、もっと激しい深いものになる可能性がこの作品の中にふくまれているように思えます。正夫や敏江についても、よい下積みの孤独な心と夢が、描かれたらと思うのです。和子にみられる細かさや柔軟な新鮮さが、他の

人物に、生き生きと欲しいのです。

いろいろ書きましたが、この作品は、たいへん演ってみたい作品です。演ることによって、観客から多くのことを学べる可能性に満ちたものだと思います。

東り演の若い作家、栗木さんの奮闘を喜び大へん、舌足らずの批評めいたものしか書けなかったことをすまなく思います。

京浜協同劇団・田中万代

発行・機関誌「東リ演」刊行所

川崎市上平間1275 京浜協同劇団内
電話 川崎 (044) (52) 8815 番

印刷・クロカワ印刷所

川崎市中丸子582番地
電話 中原 (0447) ② 6094 番
